大物船矢倉
吉野花矢倉

義經千本櫻

第一

序詞　忠なる哉忠、信成かな信。勾踐の本意を達す陶朱公、功成名遂て身退く、五湖の一葉の浪枕、西施の美女を伴ひし、例を爰に唐倭、四海漸〳〵穩に、壽永年號も、短く立ちて元暦と、命も革、戸ざゝぬ垣根卯の花も、皆白簾と時きめきて、武威はます〳〵盛なり。寶祚八十一代の天子安德帝、八島の波に沈給へば、後白河の法皇、政を執行はせ給ふ。昵近の公卿は、左大臣の左大將藤原の朝方、君の御覺よき儘に、おのれに詔ふ者には、官位昇進申下し、依估贓屓の沙汰大方ならず、群臣是を如何共いはゞ叡慮に背んかと、各舌を卷筆や、大内記御日次に、硯取添へ座列する。瀧口に案内して、源氏の大將源九郎判官義經、院參の其粧ひ、五位の雜袍善盡し、端手を盡せし太刀飾、供の餝は三國一、西塔の武藏坊辨慶、大紋の袖立烏帽子、僧衣を憚る扮裝は、實にも勇々

勾踐の云々—陶朱公は范蠡の事にて勾踐を助け吳を亡し身退きて五湖に優遊せし事（國語）
西施—越の美人
舌を卷筆—舌を卷くにかけて口を噤む
大内記—中務省の被官にて詔勅御記錄等を司る
瀧口—御所警固の武士
日次—日記

しく見へにける。大内記取次にて、「源氏の武士參上」と申上れば左大將、「いかに義經、此度八島の合戰の樣子、法皇委しく聞召ず。天皇の入水一門の最期、御日次に記されん。中上よ」と有。義經はつと承はり、「さん候、今度の戰ひ、平家は千騎計と見へ、八島の磯に陣を張。義經が勢は四百余騎、只事にては勝事なしと、不時に寄たる鬨聲に、あはてふためき平家の勢、船に取乘沖中へ、天皇を具し奉る。其時城に火を放ち、明りに眼覺せしやらん、能登守教經小船に乘移り、稀代の弓力引詰差詰、射たる矢先は、義經が馬の先に立塞がる、佐藤繼信齡に受、馬より下にどうど落る。其首取んと菊王丸、船より磯邊に上る所、弟佐藤忠信が射返へす矢先に敵味方、互に不便の武士を、討たせし供養と相引に、其日の軍はさつと退く。明れば敵より出す扇、與市宗高射て落す。箕尾谷景清錣引、敵が感ずる味力が譽る。されば共源氏は勝軍、平家は軍兵討なされ、能登守教經、安藝の太郎、同じく次郎、二人を左右に引挾み、海へかつぱと飛入たり。是を冥途の門脇教盛、同じく經盛資盛、有盛行盛なんど、我も〳〵と續ひて入。新中納言知盛は御所の御船の御供と、進んで海にざんぶと入。天皇の御事は、やはかと存ぜし油斷の間に、二位の尼上御供し、海へ入しと聞たる計、御骸をも求得ず、女院計助り給ふ。生捕

齡―齊
門脇―かといてにかく
やはか―いかで過ちあはさんと
二位の尼上―清盛の妻
女院―清盛の娘
建禮門院

つたる輩は、先達て一紙に認め、叡覽に備へ奉れば、申上るに及ばず」と、事細かに述らるゝ。其辯舌を其儘に、日次に記し留めける。朝方苦つたる氣色にて、「それ程の功有義經」。頼朝に對面叶はず、腰越より追返された、其科を言へ、聞ん」と、聞より辨慶進み出、「我君の御爲には御兄なれ共、蒲冠者範頼卿、緩いお生れ、手柄が無さに義經公にしなずを付、彼方の手柄にせふ爲に、附從ふ佞人ばらが讒言と、氣の付ぬは鎌倉殿の無詮義」と、いはせも果ず、幾「ヤアだまれ辨慶、假令讒者の業にもせよ、一旦の兄の命、申開かず、腰越よりすごゝと歸りしは、弟の義經さへあの通りと世上の見懲。理非辨へぬ麁忽の雜言、尾籠至極」と誡めの詞。「ホヽウ神妙なり義經。軍の次第を奏問して、御前宜しく計はん」と、表面はぬつぺり取持顔、寐とりさゝんと底工み、大内記引連れて、御殿問深に入にける。小蔀の陰より左大將朝方の諸大夫、主に劣らぬ人畜の、苗字も猪熊大之進、「コレ〳〵義經殿、御油斷々々々。治つたとはいひながら、平家の殘黨、小松の三位維盛の簾中若葉の内侍、其儘に置ず共、何故かたづけて仕廻れぬ」。葵「ホヽウ何事と存ぜしに、女童の事よな。何萬人有迚も、天下のかいにならぬ事、其儘で事は濟」大「ムウ事濟とはどふ成と成次第なら、こつちも勝手。身が主人朝方公、若葉の内侍に

しなゞ―言分

尾籠―失禮
誡の詞―此下に「有て又」の三字を入れて見るべし
ぬつぺり―しらしらしく
小蔀―清涼殿の北にあり
簾中―公卿の妻を呼ぶ

しやちくさい―生意氣
ちゑ〳〵くつたーチョイ〳〵喰む

御執心」と、皆迄云せず武藏坊、「ヤァならぬ〳〵。鎌倉殿のお指圖で、緣組は兎も角も、平家方の女房を、私に引入るは味方も同然。ならぬ事」と云ほぐせば、大「ヤァしやらくさいおけ〳〵。左いふ義經、平大納言時忠の聟ならずや。言はいでも夫で知れた、若葉の内侍もちゑ〳〵くつたな」辨「ヤァちゑ〳〵くつたとは我君を雀の樣にぬかしたりな。コリヤ此方が烏なら儕は蠅、ぶう〳〵吐さずすつこめ」と、引攫んでちよいと投る、音はどつさり。大「アイタヽヽ」義「ヤレ荒立つるな武藏坊、しされ〳〵」と制する折から、御座の間の御簾卷上、左大將朝方、怪しの箱引抱へ、くわん〳〵たる其風情、朝「ヤァ〳〵義經、敬て承はれ。桓武天皇雨乞の時より、禁庭に留め置初音と名付たる鼓、義經兼て望む由聞し召及ばれ、此度の御恩賞に、院宣に添給はるぞ。拜見せよ」と指出す。義經はつと頭を下げ、「數ならぬ身に及びなき願。雨乞に用る鼓、軍の爲にと存ずる所、有がたし〳〵」と箱押戴き〳〵、「相添られし院宣とは、如何なる勅命、いで拜見」と箱の蓋開けば、内には鼓計。朝「ホヽウ院宣迚外になし。其鼓が則院宣。惣じて二つ有物を、陰陽に取、兄弟に像る。鼓の裏皮表皮、同じ育の乳ぶくらにかけ合されしは是兄弟。裏は義經表は賴朝。准へて其鼓を打と有が院宣なり」と聞もあへず、義「ハァヽ其鼓が院宣な

猪熊―入るにかく　ほくそづく―ほほゑむ

らば、頼朝義經打和ぎ、睦じく禁庭の守護致せとの勅候や」「ヤそふでない〳〵。君に忠勤を抽ずる義經を、科有と追かへせし頼朝は、法皇へ敵對ふ所存。兄頼朝を打とある追討の院宣」と、理を押枉て兄弟中、同士討させて仕廻ん工み。義經はつと當惑し、指俯伏いて居給ひしが、「コハ日比に異成法皇の勅命。假令叡慮に背く共、兄を討事存じも寄ず。頼朝に科有ば、義經も御刑罰に罰せらるゝが弟の道。所詮此初音の鼓、申請ねば院宣も承はらず」と指戻せば、朝方彌〳〵したり顔、「綸言は汗のごとし。勅命を背けば義經、朝敵なるが合點か」と、無理と非道に云枉る、工みと知ても勅命と、いふに返答恐れ有、只「ハツ〳〵」と計りなり。堪り兼て武藏坊ずつと出、「コレサ左大將殿とやら、王様は天下の鑑、無理云しやれば天下中が、皆無理いふが合點か。無理が有なら傍に居る公家の役で、何故鎭めぬ。大敵にも怯まぬ大將、能ふ一言でやりこめたな。云負させては此腹の虫が堪忍せぬ。サア出直して誤りや」と、腹立つ儘の傍若無人。義經はつたと睨ませ給ひ、「やをれ辨慶、高位高官に對しての惡口、最前より無禮の段々言語道斷其處立ちされ。我目通へは叶はず」と、以ての外の御機嫌に、詮方もなく立端なく、誤り猪熊好い氣味と、ほくそづくを目もかけず、朝方に打向ひ、義「日比の懇望返つて仇となる

惡事を調べの云云―義經朝方の惡事を調査す、締括は鼓の錄

關省の花云々―朝廷に居て時めきたるをいふ白樂天の關省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中の詩に由る

たが〳〵―せがいとしぼや―いとほしの轉

鼓、申請ねば君に背く、申受れば兄に敵對。二の命を背かぬ了簡。打と有院宣の鼓、たとひ拜領申ても、打さへせねば義經が、身の誤りにもならぬ鼓、拜領申奉る」と、鼓を取て退出す。御手の中に朝方が、惡事を調のしめくゝり、實も名高き大將と、末世に仰ぐ篤實の、强優なる其姿、一度に開く千本櫻、榮へ久しき　三置君が代や　蘭省の花の時、錦帳の中にかしづかれし、小松の三位維盛の御臺若葉の内侍、若君六代御前、平家都を落しより、今は盧山の隱れ里、北嵯峨の草庵に、親子諸共身を忍び、仕馴ぬ業も佛の行と、谷の流を水桶に、主の尼と指荷ひ、庵の内に立歸り、主コレ申御臺樣、わしが一日、たが〳〵するを笑止がつて、荷の片端お手傳ひなされ、それ〳〵お肩が痛さふな。下々のする業は、夢に見もなされまい。時世迚おいとしぼや。アレ何聞てやら、六代樣のにこ〳〵と笑ふてじや。能ふお留守なされたなふ」と、ほた〳〵いふてあしらへば、御臺所も打しほれ、「知りやる通り、夫の維盛樣、御一門と諸共、安德天皇を供奉し、都を開き給ひしより、此庵に親子諸共、永々の世話になるも、そなたが昔お館に、奉公仕やつた少の所緣。維盛樣も西海の軍に、海へ沈みお果なされた共、又生てござる共、樣々の噂なれ共、都をお立なされた日を、御命日と思ふて居る。殊に今日は、舅君重盛樣の

阿伽―佛に奉る水
狹布の云々―陸奥の狹布の里にて出す布は幅狹し
十二單―女官の装束にて憂き事多きを寄せたり最下に白小袖を著する故卯の花色といへり
思ひ―火をかくいでそよ―オ、それよ

御命日なれば、心計の香花取て、阿伽の水も供へん爲、手づから水を汲ました。取分此月はお祥月、昔の形で回向せば、せめて佛へ追善と、狹布の細布身せばなる、さもしき小袖ぬぎ捨て、卯の花色の二つ襟、うきに憂身の數々は、十二單の薄紅梅、冷泉思の色や緋の袴、いでそよ元は大内に、宮仕へせし曠の絹引繕ひ、蒔繪すつたる手箱より、重盛公の繪像を取出し、さら〳〵と佛間にかけて手を合せ、「小松の内府淨蓮大居士、佛果菩提」と回向して、「コレ六代、そなたの爲には祖父君。稚けれ共平家の嫡流、能ふ手を合して拜みやいの。取わけて此繪像、親子御迚、維盛樣に生うつし。ほんに扨重盛樣が今迄生でござらふなら、平家はよもや亡びはせじ。孫子の爲にもよからふに、あなたがござらぬばつかりで、此憂目を見るわいの」と、繪像に向ひ在すがごとく、くどき立〳〵、かつぱと伏て泣給ふ。折節表へ來る足音、ちやつと心得主の尼、枕屏風を引廻し、お姿隱す間もなく、扉引明けずつと這入、男「コレ〳〵庄屋殿へ判持てごんせ」主「ハァ、夫は合點がいかぬ。今迄は一年に一度、宗旨の改めより外に、判の入ぬ獨尼。殊に此方も、月別取に來る歩行殿とは違ふた。マア何事じや聞さつしやれ」男「イヤされば、爰らの事では行そもないが、此嵯峨の庵室に、珠數の實で過るは付たり、表向には佛を見せかけ、内證へ

髪長―尼をいふ　線香を立て云々―時間を定めて逞賈する　祇王云々―此三人清盛の寵を受け後尼になつて嵯峨に隠れし事平家物語に見ゆ　ひつた―ひたすら　ちよろり云々―チヨイト一足とられた　ゆさ〳〵―ゆさ〳〵

取入と小みめの美い髪長を出しかけて、御所出尼出園者、大海小海と名を付、一屏風を何ほ宛と、佛前の線香を立て、暗商をするといの。是といふも祇王祇女、佛などといふ白拍子のしやの果が、尼になつて此嵯峨に居る故に、それで所がみだらに成つた迚、人別の判形。此庵にも其様な、じだらくはござらぬかや」主「ヲヽ、あの云しやる事はいの。佛様は見通し、そんなじだらくな事何でせう。聞も汚れる、往んで下され」男「ハテ往にます。早ふ印判おこさつしやれ」と、家内を見廻し立歸る。お氣が詰まろと主の尼、枕屏風を押のけて、「今のをお聞なされたか。覺へもない事いふて來て、そしてマア氣味の悪い、家内をひつた見廻して。ヲヽ是はしたり、今の奴めにお前のお草履、ちよろり一足せしめられた。ヱヽ小盗人であつた物、氣が付いで取れた」と、いへば御臺も涙ぐみ、「世を忍ぶ身の上は、何角に付て案じが絶ぬ。扨も〳〵情なき、親子の身では有ぞいの」と、内は歎きに曇れども　外は春めく物賣聲、菅笠加賀笠、ゆす〳〵一荷打擔げ、「笠をお召なされぬか」と、門口より差覗けば、主「ヲヽとでもない。尼の内に菅笠が何で入る。胡散な和郎じや」と呵られて、商「イヤお氣づかひな者でなし、私でござる」と、笠取て、はいるを見れば小金吾武里。御臺所は飛立計、「此間は便も聞す、どふかかうかと案ぜしに、サアサ

ア爰へ」と有ければ、小金吾も手をさげて、「先は御臺所にも御堅勝、ホウ若君も、御機嫌よき御顔ばせを拜し、拙者も大悅仕る。いか樣にも今日は、先君重盛公の御祥月、御命日なれば、御裝束を改め、御回向をなされしよな」と、佛間に向ひ手を合せ、小「此君お一人ましまさぬ故、御一門はいふに及ばず、我々迄も憂艱苦」と、誓し涙にくれけるが、「拙者めも御貢の爲、思ひ付たる笠商賣。前髪立の此小金吾、何が仕付ぬ商賣なれば、御推量下さるべし。扨先申上たきは、主君維盛卿の御身の上。未だ御存命にて、高野山に御入、と慥成都の噂。何とぞ拙者も若君のお供をして、高野に登り、御親子の御對面、一つには小金吾も再び主君の御顔を拜し申度願ひ、夫故旅の用意を致し、只今參り候」と、聞より御臺も夢見しごとく、「なに我夫の高野とやらんに生存へてござるとや。夫は嬉しや有がたや。六代計と言はず共、女子の上らぬ山ならば、麓迄自も同道せよや武里」と、悅び涙にくれ給へば、主「ヲヽお嬉しいはお道理〳〵。わしもお供したけれど、足手まとひな年寄尼。それならば日のたけぬ内、一時も早いのが」小「ヲヽ成程寸善尺魔のなき中に、御親子俱に御用意早ふ。笠は私が手の物、早速ながら御用に立ん」と、俱に用意の折こそあれ、表の方に人音足音、尼は心得、いつもの通り、佛壇の下戸棚へ、御臺

寸善尺魔―よき事少くよかちぬ事多し

親子御押入つきやる其間もなく、朝方の諸大夫猪熊大之進、家來引倶し柴の戸踏のけ、どやくゝと亂れ入、「此庵室に維盛の御臺、若葉の内侍忰六代、諸共にかくまひ置申、注進によつて召捕に向ふたり。何國に隱せし、有やうに白狀せよ」と、星をさゝれて主の尼、はつと思へど素知らぬ顏、「是は又御難題。維盛の御臺とは、所緣かゝりもなければ、かくまふ筈もなし」と、いふに傍から小金吾武里、夫は定て庵室違、外を御詮議遊ばせ」と、聞もあへず、猶「ヤア前髪めが小指出た指圖、先うぬは何奴」小「イヤ私菅笠賣」時「ヤア商人ならばとつとと歸れ」と、家來に持せし絹緒の草履取出し、「コリヤ詩はすまい爲に、家來を所の歩行にして入込せ、證據の爲に取たる草履。年寄尼めが赤たれた履物穿きはせまい。サア是でもあらがふか。奥へ連行責さいなみ、白狀させん」と主の尼が、小肘取てぐつと捻上、「ソレ家來共拷問せよ」とあらけなく、引立々々一間の中に入にける。小金吾は氣も氣ならず、何とせんかとせんと、奥口窺ひ透間を見て、御臺親子を出し參らせ、幸の菅笠荷と、細引かなぐり蓙押明、荷底に二人を入參らせ、旅の用意の風呂敷包、重盛公の繪像迄、取ては押込さらへ込、あたふたしつらふ其中に、尼を一間に縛り上、立出る大之進、「察する所、風を食ふてふけらした物で有、菅笠屋め存ぜぬか」小「ア

かなぐり―ほふり棄て
ふけらした―逃がした

笠のいたゞき―笠の裏の頭にあたる所につくる小き蒲團の如きもの　杁―天秤棒

醉―義經の妾醉卿にかく　卿の君―京の君にて義經の北の方、久我大臣の女　功ある鵜井―甲ある鵜にかく

ア如何樣、夫ならば此庵の裏傳ひを、氣高い女が子を連て、逃たのはたつた今」と聞より、猪熊目をひからし、「ヲヽ、夫に極つた。高が女の足なれば、ぼつかけて搦めとらん。家來二人は是に殘り、奧の尼めを取逃すな」と、跡を慕ふて追蒐行。「してやつたり」と小金吾は、心も空に荷を打かたげ、行んとするを二人の家來、兩方より小金吾が棒端取て、どつかと引すへ動かさねば、小「コリヤどふなさる」家來「ヤアどふするとは胡亂者。此荷箱に挾まれたは女の著物」小「イヤ是は誂の笠のいたゞき」家來「ヤアぬけ〳〵と吐かすまい、御臺親子に極つた、ぶち明て詮義せん」と、立かゝる、兩人が肩骨つかんで引退る。「詮義させぬは面者」と、すらりと拔て切かくる。引ぱづし〳〵、杁を振上げ、弓手馬手へ叩き伏せ、急所々々を力に任せ、叩きのめせば二人の家來、目鼻より血を出し、のた打廻つて死てげり。敵の歸らぬ其中に、と荷を打擔げ聲張上、「菅笠加賀笠、笠編笠」網を遁れて三重出て行。花の姿も引かへて、主從七騎駒のはな、營の岡で返咲、再び御運開かれし、彼頼義の奧劔攻、君は八島の勝軍、國も靜が舞扇、いや〳〵どつと譽むる聲、鯨波とは打かはり、賑はふ御所は二條堀川、九郎義經の奧方勇の御催し、中座の御殿は卿の君、新殿は九郎義經、一方女中が取まけば、かたへに竝ぶは駿河の次郎、次は功有

る龜井の六郎、倍臣外樣に至る迄、舞の樣子はしらね共、やつちや名人お上手と、靜譽るも君譽る、色めきてこそ見へにけれ。御殿から御殿への女中の使、此方より龜井が使者の御口上、互にめでたい面白い、お氣はつきぬか好い慰と、御夫婦中でも禮儀式。事終れば樂屋より、裝束改め靜御前、廣庇に立出、駿河龜井に會釋して、御臺所の御前に向ひ、「御望と有故、拙き舞ぶり御目にかけ、おはもじさよ」と述ければ、北「イヤナウ始めて見ましたが　面白い事。此間より醫の助を請ても、心惡しく暮せしに、我君樣のお勸で、今日は思はぬ好い慰。そもじには御太義」と、仰にはつと辭義に余り、靜「其御機嫌に甘へ、申上たいお願ひ有。お取上下されふか」と、物々しげに云上る。「ナウ其尋に及ばぬ事、願とは餘所々々しい。近う寄つて物語」と、仰に猶も恐れ入、靜「お願ひと申は外でもなし。氣の毒は武藏坊辨慶殿。何か大きな仕損ひした迚、樂屋へ來て大づけない　ほろ〳〵泣いて私を賴み、つき詰つた氣の細いお人そふで、餘りと申せばいぢらしし。何とぞお詞添へられ、我君樣の御機嫌も直る樣、此事ひたすらお願ひ」と申上ぐれば御臺はおかしく、君にも笑ひ、駿河の次郎佛頂顏、「いやはや、かゝつた事ではない。六郎お聞やつたか。武藏坊辨慶共いはるゝ者が、女中を賴んでお詫言、樂屋へ往て泣といの。ホウちつ

おはもじ―お恥かし

大づけない―ものとなげない

馬のあふた—氣の合うた

笑止と—氣の毒と思うて

とそふであろ〳〵。彼めと馬のあふた伊勢片岡、態井鷲尾、軍治つてより、休息のお暇で國々へ歸る、頼みに思ふ佐藤忠信は、母の病氣と有て出羽の國へ往ぬる、貴殿と某は相手にならず、どこ打て舞ふで舞から取入て詫言、まそつと懲していつその事、坊主天窓を奴にせふと、いふて見たらば猶よかろ」と、内證評議も猶おかしく、御臺は笑の内よりも、「如何成仕損じせし事ぞ、笑止おかしい執成」と、仰有ば義經公、「過つる參内の折から、禁庭にての我儘、左大臣朝方公への悪口、御家來を踏打擲。其場で急度呵付、我目通へ叶はぬ、と申付けたが、夫故ならん。手綱赦すと人喰馬、公家でも武家でもたまらさぬ、持あぐんだ鱸坊主め。まそつと懲せ」と御上意に、駿河の次郎圖に乗て、「地體彼の七つ道具が大きな邪魔。源氏には坊主の大工が有、とお家の名折。此義も急度止る樣、仰付けられ然るべし」と、申上れば龜井の六郎、「イヤまだ七つ道具は御普請の役にも立が、難義な物は彼の大長刀、柄も四尺刃も四尺、八尺の物を振廻すによつて、傍邊りの鼻がたまらぬ。太平の代には役に立ぬ人間、兎角當分押込て置がよかろ」と評議區區、御臺は笑止と、「ヤレ其樣に讒るを聞たら又怒ろ。俱々お詫」と執成あれば義經公、「性懲もなき坊主め、急度異見し重て荒氣を出さぬ樣、靜も俱に」と座を立給ひ、駿河

龜井と引連て、一間へこそは入給ふ。靜は嬉しく、「サア急いで武藏殿を呼まして」と、女中を走らせ、靜「御前のお詞添た故、有難ふ存ジます」と挨拶すれば、御臺「イヤそもじのお願ひ故」と、互の辭義も戀の義理、悋氣嫉妬の角もなく、丸い天窓の武藏坊、妙婢に引立てられ、こはい〳〵で七尺の、體も三尺八九寸、四尺に餘る大太刀を、引ずらしてぞ這出る。妙共口々に、「去とては片意地な坊樣。アレ御覽じませ、跡ぢよりばかり致されます」と、告口いへば、辨「是さ〳〵、其樣に惡くいはぬ物。弱身へ付込で慘い和郎達、人には報が有ぞよ」と見廻す目玉に、「アレ又睨まれます」「コレサ細目だ〳〵」と、目顏しかめて身を縮む。靜は手を取御前へ連出、靜「モウ堪忍しておやりなされて下さりませ」と、半分笑ひの執成に、卿の君はしとやかに、「君は船なり臣は水、浪立時はおのづから、君のお船を覆す。家來の業迚云譯ないぞ、重て急度荒氣をやめ、おとなしう成たらよかろ」と、子供異見に、辨慶はたど、「アイ〳〵」と揉手して、誤り入し風情なり。然る所へ遠見の役人、篠原藤內あはたゞ敷罷出、「今日大津坂本の邊りを順見致せしに、恐び〳〵に鎌倉武士、都へ入込候。中にも土佐坊正尊、海野の太郎行永、熊野詣と僞り、我君の討手に向ふと專の風聞、殊に只今、鎌倉の大老川越太郎重賴、我君へ直談迚、お次に控

體も―三尺八九寸―體も縮まる
跡ぢより―後退り

君は船なり云々―右子にある語

順見―巡見

へ罷有、如何計ひ申さんや」と、尋申せば卿の君、「心得ぬ事どもや。其川越太郎は、自とは故有人、土佐坊海野が討手の樣子、知らさん爲に來りしか。何にもせよ、緣あれば苦しうなし、通し申せ。其旨君へも申上げん。次手に武藏もお目見へ」と、座を立給へば武藏坊、「討手とはうましく。我等が世盛忝い。土佐坊でも海野でも、たつた一呑一捲、首引拔いて參らん」と、駈出すを靜は押とめ、「ソレそれがモウ惡い。お上の御意も待ず、おとましの坊樣や」と無理に引立、御臺と俱に、義經公のおはします、奥の殿へぞ急ぎ行。程なく入來る武士は、鎌倉評定の役人川越太郎重頼　大紋烏帽子爽に、年も五十路の分別盛り、廣疵に入來れば、御主九郎判官御裝束を改められ、しづくと立出給ひ、「ヤア珍らしや重頼、兄頼朝にも御變なく、百侯百司も恙なしや」と、仰にはつと頭をさげ、川「先は御堅躰を拜し恐悦至極。右大將にも安全に渡らせられ、諸大名も毎日の出勤、賢慮安んじ下さるべし」と、申上れば義經公、「シテ其方は海野土佐坊同役にて登りつらん。但は外に用事有や」と尋に重頼、「さればの義、君に御不審三ケ條、一々お尋申上、御返答によつて海野、土佐坊と同役、恐れながら過言は御赦免なされ、尋る子細御返答」と申上れば、義「ホ面白し。此義經に不審あらば、兄頼朝に成かはり、過言は赦す、

おとましし―疎ましし

尋て見よ。中開かん遠慮無用」と、仰に猶も平伏し、「冥加に余る仕合せ。迚もの事に御座改め下されよ」と、席を立ば大將も未座へさがつて川越を、上座へこそは請ぜらる。席改つて川越太郎、「いかに義經、平家の大敵を亡ぼし、軍功を立ながら、腰越より追かへされ、無念に有ん、但しさもなかりしか」はつと義經袖かき合せ、「親兄の禮を重んずれば、無念なとも存ぜず」川「ヤア其詞虛言々々。親兄の禮を重んずる者が、平家の首の內、新中納言知盛、三位中將惟盛、能登守教經、此三人の首は贋物、何故僞つて渡したぞ。先此通りの御立腹、サア御返答は」と尋れば、義「ホヲ、其云譯いと安し。贋首を以て眞とし、實を以て贋とするは軍慮の奧義。平家は廿四年の榮華、亡び失ても舊臣倍臣、國々へ分散し、赤簇の翻する時を待。一門の中にも三位中將惟盛は、小松の嫡子で平家の嫡流、殊に親重盛仁を以て人を愛求、厚恩の者其數知らず。惟盛存へ有と知らば、殘黨再び取立るは治定。又新中納言知盛、能登守教經は、古今獨步のゑせ者、大將の器量有と、招きに從ひ馳集る者多からん。さすれば天下穩ならず、何れも入水討死と世上の風聞、幸に一門殘らず討取しと、贋首を以て欺きしは、一旦天下を靜謐させん義經が計略。と有て捨置れぬ大敵故、熊井懸尾、伊勢片岡、究竟の輩を休息と僞り國々へ

ゑせ者―似而非なる者なれど強は剛の者

分け遣はし、忍び〳〵に討取手筈。斯く都に安座すれ共、心は今に戰場の苦しみ、兄頼朝は鎌倉山の星月夜と、諸大名に傅かれ、月雪花の翫び、同じ淸和の胤ながら、晨には禁庭に膝を屈し、夕部には御代長久の基を量る。何時か枕を安んぜん、淺間しの身の上」と、打悄れ給ふにぞ、實に理と重頼も、思ひながらも役目の說破、「ムウ扨は其御述懷有故、御謀叛思し立れしか」と、いはせも立ずくはつとせき上、義「ヤア穢らはし。謀叛とは何を以て、何を目當」と御氣色かはれど、ちつ共恐れず、川「君鎌倉を亡ぼさんと院宣を乞給ひしに、初音の鼓を以て、裏皮は義經、表皮は頼朝。打といふ聲有迚、頂戴有しとは左大臣朝方公より急の知らせ」と聞て義經、「扨は朝方が讒言せしな。其鼓の事は、某兼ての懇望。下し置るゝ場になつて、反逆によせたる詞の品。是朝方のはからひとは思へ共、院中より下さるゝ恩物、請納めずば綸命に背く、受ては兄頼朝へ孝心立ず、と望に望みし一挺なれ共、打てば鼓に聲有と、アレあのごとく、床にかざりて眺むる計、神明佛陀も上覽あれ、打もせず手にもふれず」と仰に川越ハ、、、、はつと三拜し、「其御誓言の上、何疑ひ奉らん。二つの仰分られ、さつぱり明白。去ながら、情なきは今一つ、御簾中卿の君は、平大納言時忠の娘。平家に御緣組れし心はいかに」藝「ヤアおろか

上覽—照覽

な尋。兄頼朝の御臺政子は北條が娘。時政氏は平家に有ずや」川「イヤそれは主君頼朝、伊豆の伊東に御座有時、北條一家を味方に付ん計略の御縁組」義「ヤア言ふな〳〵。元郷の君は汝が娘。平大納言へ貰はれ、育てたは時忠、肉身血を分けた親は其方。なぜ夫程の事、鎌倉にて云譯せざるや。但義經と縁有と思はれては、身の瑕瑾と思ひ隱し包んだか。卑怯至極」と仰を聞より川越太郎、居たる所をどつかと居直り、川「ヤアお情ない義經公。清和天皇の末流、九郎義經を聟に持たは、恐らく日本の舅頭。五十に餘る川越が、名を惜んで祿を貪らふや。今肉縁をあかせば、此方のいひ譯するも暗く、縁者の證據と成故に、ヲ鎌倉では隱した包んだ。影になり日南になり、云くろむれ共御前には、讒者の舌強くなり、智者といはれし秩父さへ、力に及ばぬ平家と縁組、今に成て川越が娘といふて、得心有ふか。卑怯至極と思し召、御心根も面目なし。皺腹一つが御土産」と、差添手早に抜放す。「ノウ是待て」と、卿の君、駈出て手に縋り、「其云譯は自」と、刃物もぎ取我咽へ、ぐつと突立どうど伏。是はと驚く義經公、靜も駈出抱起し、藥よ水よと狼狽へて、涙より外詞なし。川越は見向もせず、「出かされた時忠の娘。左樣なうては御兄弟、御和睦の願ひも叶はず。とくに呼出し、我手にかけんと思ひしが、我と最期を遂さして

秩父―畠山重忠

死後に貞女と云せたく、わざと自滅と見せかけし。よふ拔身を奪取た。適健氣な女中や」と、餘所に譽むるも心は涙。義經間近く立寄給ひ、「斯あらんと思ひし故、わざと川越が血脉を顯はし、平家の緣を除かんと、思ひし甲斐もなき最期。淺ましの身の果、よしなき契をかはせし」と、御目に余る涙の色　靜御前も諸共に、彼方此方を思ひやり、泣しづみ給ふにぞ、手負は君を戀しけに、打ながめ〳〵、「一つならず二つ迄、大切な云譯立、殘る一つは平家と緣組、其科わたしが皆なす業。戀慕ふ身をお見捨なう、是迄はいかゐお情、世に難面とはかないは、明日を定めぬ人の命。短ふお別れ申ます。靜殿、我君樣を大切に賴むぞやいの」とせき上て、わつと計に泣けるが、「サア川越殿、平大納言時忠が娘の首、賴朝樣へお目にかけ、御兄弟の御和睦。それが冥途へ好い土產」と、首指のばす心根を、思ひやる程川越太郎、胸に滿くる涙をば、呑こみ〳〵傍に立より、「似合ざる喩なれ共、玄宗の后楊貴妃は、馬嵬が原にて哥舒翰に討れ、天下の煩ひを拂ふ。御兄弟確執とならば、萬民の歎き。淸き最期も天下の爲。出かされた適々。あかの他人の某が、介錯して進ぜう」と、刀するりと拔はなす。姫「ノウ其あかの他人のお手を藉るも深き御緣。迚もの事にたつた一言」川「親子の名乘は未來でせう」姫「さらば〳〵」川「さらば〳〵」と

川越―三途の川を越えるにかく

さないと―左様しないと

みしやぎ―打ち潰す

てつぺい―天邊頭の頂

討首よりも、骸は先へ川越が、どうと坐してぞしほれ居る、心ぞ思ひやられたり。靜御前も義經も、歎きに沈み給ふ折から、耳を突ぬく鐘太鼓、閧をどつとぞ上にける。「コハ如何に」と靜は仰天、君も驚き、薬扱は海野土佐坊めが、責かけしと覺へたり。龜井駿河」と仰の内より、押取刀で兩人が、表をさしてかけ出るを、「ヤレ待れよ」と太郎は呼留め、川「仰分を聞迄はと留置しを責かけたは、彼等も讒者と一味の族。とはいへ、兩人鎌倉殿の名代。過有ては敵對するも同前。只速に追かへすか、威の遠矢で防かれよ。さないと忽義經の怨」と、云含れば兩人は、「尤道理」と呑込で、表をさしてかけり行。義經公も川越が、詞至極と猶も氣を付、「無分別の辨慶が心元なし。武藏々々」と呼給へば、妘立出で、「武藏殿は最前より打しほれ居られしが、鯨波を聞と早、悅び勇んで行れし」と聞より「此奴事仕出さん。靜參つて急ぎ制せよ。矢先危しソレ鎧」「はつ」と妘持出づる、其間に投押の長刀かい込、表へ走る女武者。堀川夜討に靜が働き、末世にいふも是ならん。如何と案じ給ふ所へ、龜井駿河かけ戻り、「我々味方を制して的矢を射させ、追歸さんと存ぜし所、武藏坊の無法者、玄翁大槌を以て敵をみしやぎ、大鋸にて人を引切、討手の大將海野の太郎を、てつぺいから爪先迄、擲き碎いて候」と申上れば、大將

しなしたり―しくじったり
ひろいたり―つまらぬ事をしたり

ぐはい―中よくすることなるべし

是非なく―泣くにかく

靭れ、川越太郎ははつと計、「ヘエしなしたり、ひろいたり。討手の大將討取つては、御連枝和睦の願ひも叶はず、不便や娘も詮なき犬死。是非もなき世の有樣」と、悔み涙に義經公、「古人は人を恨ず。傾く運のなすわざ、と思へば恨みも悔もなし。武藏が不骨を幸に、都をひらかば綸命も背かず、兄頼朝の怒も休まる。是を思へば卿の君が最期、殘り多や」と御涙。「皆夢の世の有爲轉變、我も浮世に捨られて、驛路の鈴の音きかん、龜井駿河供せよ」と、立出給へば川越太郎、しほれながら暫しと留め、床に飾りし鼓携へ、「君多年御懇望ありし重寶、殘し置かれては、取落されしと申すも殘念。院勅に打てといふ聲ありとは、皮より穢れし讒者の詞。打つを拙者が調べ換へ、再び御連枝ぐはいの取持、長路の旅の御物忘」と、心をこめて差出す。義經御手にふれ給ひ、「親しき兄弟の因をば、打切らるゝも運の盡き。結びかへせよ川越」と、駿河龜井を御供にて、すごゝ館を出給ふ御心根のいたはしさ、見送る人も鎌倉へ、是非なくも立歸る、世の成行ぞ是非もなき。跡は貝鉦鯨波、震動するも理りや、武藏坊弁慶が海野の太郎を討取て、次手に土佐坊せしめてくれんと、追かけ廻つて正尊が、乘たる馬の尻邊に乘、ぼつ立蹴立白洲の庭、館もゆるぐ撞鐘聲、「ヤア〳〵我君やおはする。討手に向ひし海野は粉にして、土

料理の喰殘し―討漏の敵兵

味をやる―小癪な事しをる

ぶり〳〵云々―ゆさぶりつゝドツサリと尻餅つく

投算―錢を擲ち

佐坊めを生捕たり。龜井駿河は何國に居る。武藏が料理の喰殘し、賞翫せぬか」と呼はつても、館はひつそとしづまつて、答へる人もなきふしぎ、不思議不思議と見廻す内、坂東一ヂの土佐坊が、腰の上帶引切て、馬より飛下り大聲上、「者共來れ」と下知の内、兵具の兵數百人、「ソレ討とれ」と追取まく。武藏も馬より一足飛、太刀も刀も鷲づかみ、鵰づかみの首の骨、握るときれる數萬力、雨か霰か人礫、透間を見て土佐坊が、武藏が弱腰しつかと抱。辨「シヤ小僧めが味をやる。腰の療治で捻るか揉むか、擦つておけろ」のぶり〳〵どさり、尻餅ついても怯まぬ曲者、四尺に餘る大刀物、討てかゝれば閃りとはづし、てうど切ば柄先で、しやんと請とめ、辨「ホヽヽ出かす〳〵、腰をさすつた其かはり、首筋ひねつてくれんず」と、ぱつしと反ねて身をかはし、大太刀蹴落し素首攝、ぐつと引よせ腰にひつ付、「我君樣御臺樣、龜井やい駿河やい」と、引ずり廻り呼廻り、尋廻れど人々の、御行方も見へざれば、「扨は此家を落給ふか。コハ何ゆへ」と身の科と、思ひよらねば言ふ人も、答ふる人も梢の鳥、泣て詫する土佐坊を、右を左りへ持直し、「地體此奴が逃廻り、隙取た故お供におくれた。おのれが首の飛方が、我君樣の御行方。よい投算」と引つかみ、直平天窓を頭巾越し、すほりと拔て空へ投、輾けたる方は巽の間、

其表裏を見て吉凶を定む（偶言集覽）
直甲頭を云々—土佐坊の平たい頭を頭巾越しに引抜く
巳午—見ぬ間
戌亥—居ぬ

「苑原小原の方でも有まい。元は牛若丑の方、巳午もよしや吉野も氣づかひ、爰に戌亥や酉ならで、程は有まい追付ん」と、忠義と思ひ爲し事も、今に成ては木中、思ひ違の荒者が、あら砂蹴立る響きはどう〳〵、どろ〳〵、踏しめ〳〵踏ならし、義經の跡を寅の刻、風を起して追て行。

第一

吹風に連て聞ゆる鬨聲、物すさまじき氣色かな。昨日は北闕の守護、今日は都を落人の、身と成給ふ九郎義經、數多の武士もちり〴〵に成、龜井六郎、駿河次郎、主從三人大和路へ、夜深に急ぐ旅の空、跡振返れば堀川の、御所も一時の雲煙、浮世は夢の伏見道、稻荷の宮居にさしかゝれば、龜井の六郎後馳せに驅付、「正しくあの鯨波は鎌倉勢。後を見するも無念なり。御赦を蒙つて一合戰仕らん」と、申上れば、義「いやとよ重淸、都にて舅川越太郎が云し鎌倉殿の憤り、明白に云開き、卿の君のあへなき最期も、義經が身の云譯なるに、早まつて辨慶が、海野の太郎を討たる故、止む事を得ず都をひらくは、親兄の禮を思ふ故。此後は猶以て、鎌倉勢に刃向はゞ、主從の緣もそれ限り」と、仰に二

伏見町—臥にかく

荒法師―あちずにかく

ぬくもり―暖まり

人も腕撫さすり、拳を握つて扣ゆる折から、義經の御跡を慕ひこがれて靜御前、輾つ轉びつ來りしが、それと見るより縋りつき、「胴慾な我君」と暫し涙に咽びしが、「武藏殿を制せよと、わしをやつた其跡で、早御所をお退と聞、一里三里おくれふ共、追付は女の念力。能ふも〳〵慘たらしう、此靜を捨置て。二人の衆も聞へませぬ、私も一所に行やうに、執成いふて下さんせ」と、歎けば俱に義經も、情によはる御心、見て取て駿河次郎、「ヲ、主君も途次、噂なきには有ね共、行道筋も敵の中、取分て落行先は多武の峯の十字坊、女義を同道なされては、寺中の思はくいかゞなり」と、嫌し宥むる時しも有、武藏坊辨慶息を切て馳著、「土佐坊海野を仕舞て除けんと都に殘り、思はず遲參仕る」と、言ひもあへぬに御大將、扇を以てう〳〵と、なぐり情も荒法師を、目鼻も分かず叩き立、義「坊主びくとも動いて見よ。義經が手討にする」と、御怒の顏色に、恐ひがけなき武藏坊、はつと恐れ入けるが、「此間大内にて、朝方殿に惡口せし辻御勘當、永々出仕もせざりしが、靜樣の詫言で、御免有たは昨日今日。其勘當のぬくもりが、手の中にほの〴〵と、まださめ切ぬ其中に、又候や御機嫌を損ふたそふなれど、辨慶が身に取て不調法せし覺へなし」義「ヤア覺なしとはいはれまい。鎌倉殿と義經が、兄弟の不

無下―疎略

足ない―少い

是に懲よ武藏坊―是に懲よ道才坊の諺をもじる

和を取結ばんと、川越が實義、卿の君が最期を無下にして、義經が討手に登りし鎌倉勢をなぜ切た。是でも汝が誤りで有まいか。サア返答せよ坊主め」と、はつたと睨んで宣へば、武藏は返す詞もなく、頭も上ず居たりしが、「憚ながら其事を、存ぜぬにてはあらね共、正しく御所の討手として登つたる土佐坊、いかに御意が重い迚、主君をねらふをまじ〳〵と、見て居る者の有べきか。さある時は、日本の忠義の武士は絶果なん。誤りならば幾重にも、お詫言仕らん。いかに御家來なれば迚、餘り慘い呵りやう。是といふも我君の、漂泊より起つた事。無念々々」と拳を握り、終に泣ぬ辨慶が、足ない涙をこぼせしは、忠義故とぞ知られける。靜も武藏が心を察し、「あれ程にいうてじやのに、どうぞまあ御了簡」と、柔かな詫言の、其尾に付て龜井駿河、「御免々々」と詫ければ、義經面を和らげ給ひ、「母が病氣で古鄕へ歸りし、四郎兵衞忠信を、我が供に召連なば、武藏が詫は聞ね共、行先が敵となつて、一人でもよき郎等を、力にする時節なれば、此度は赦し置」と、仰に辨慶はつと計に頭を下げ、坊主天窓を撫廻し、「是に懲よ武藏坊。アア靜樣、重々の詫言、いかゐお世話」と悅べば、舞「マアお詫がすんでめでたい。是からは此靜が君のお供をする樣に、取なし賴む武藏殿」と、思ひ詰たる其風情、「今詫言賴ん

當り眼云々―すぐ目の前に頼みの返し

尾形―緒方維義

だ迚、當り眼な返報。義理でもあつと申たけれど、此辨慶其意を得ぬ。御家來さへ跡先に、引別れて行忍の旅、落付所は兼て聞置多武の峯、是以て女は叶はず。夕にかはる人心なれば、十字坊の所存も量がたし。是より道を引ちがへ、山崎越に津の國尼が崎、大物の浦よりお船に召し、豐前の尾形を御頼有ふもしれず。夫なれば長の船路、猶以てお供は成まい。ふつょりと思ひ切て都にとどまり、君の御左右を待給へ」と、言ふにわつと泣出し、靜「今迄お傍に居た時さへ、片時お目にかょらねば、身も世もあられぬ此靜、いつ又逢れる事じややら、行先知れぬ長の旅、跡に殘つて一日も、何と待て居られうぞ。いか成憂目に逢ふ迚も、ちつとも厭はぬ武藏殿、連て往て下さんせ」と、涙ながら我君に、ひし〳〵と抱付、離れがたなき風情なり。靜が別に判官も、目をしばたょきおはせしが、「只今武藏が云通、行先知れぬ旅なれば、都に殘り義經が、迎の船を待べし」と、龜井に持せし錦の袋、「夫此方へ」と取出し、「是こそ年來義經が望をかけし初音の鼓。此度法皇より下し賜はり、我手には入ながら、一手も打事なりがたきは、兄頼朝を討と有院宣の此鼓、打ねば違勅の科遁れず、打ば正しく鎗倉殿に敵對も同然、二つの是非を分け兼たる此鼓、身をも離さず持たれ共、又逢迄の筐共、思ふて朝夕慰め」と、渡し給へば手に取

さりともと―それでも若しやと

駿河―するにかく

聲をはかり―聲を限り

上、今迄はさりともと、思ふ願ひの綱も切、鼓をひしと身に添へて、かつぱと伏して泣居たる。龜井六郎進み出、「長詮義に時移り、土佐坊が殘黨原、討て來らば御大事」と、重清に諫められ、涙と共に立給へば、靜は其儘我君の、御袖にすがりつき、「わし一人振捨られ、焦死に死んより、淵川へも身を投て、死ぬる〳〵」と泣きさけべば、人々も持余し、過ち有ては我君の御名の疵、何とせん方駿河次郎、立寄りて會釋もなく、取て引退け、「幸の縛り繩」と、鼓の調引ほどき、靜の小腕手ばしかく、過させぬ小手縛り、道の枯木に鼓と俱に、雁字絡に括りつけ、「サア邪魔は拂ふたり。いざさせ給へ」と諸共に、道をはやめて急ぎ行。跡に靜は身をもがき、我君の後影、見ては泣泣いては見、「ヱヽ胴慾な駿河殿。情にてかけられた縛繩が恨めしい。引ば悲しやお筐の、鼓が損ねう何とせう。ほどいて死せて下され」と、聲をはかりに泣さけぶは、目も當られぬ次第なり。「落行義經遁さじ」と、土佐が郎等逸見の藤太、數多の雜兵、めい〳〵松明腰挑燈、道を照して追かけしが、枯木の影に女の泣聲、何者ならんと立寄て、逸「ヤア此奴こそ音に聞、義經が妾靜といふ白拍子。繩迄かけてあてがふたは、うまし〳〵。此鼓も義經が重寶せし、初音といふ鼓ならん。此道筋に判官も隱れ居るに疑なし。福德の三年目」と、藤

太手早く縄切ほどき、鼓を奪取引立行んとする所へ四郎兵衛忠信、君の御跡したひ來て、斯と見るより飛かゝり、藤太が肩骨ひつ摑み、初音の鼓を奪返し、宙に提げ二三間、取て投退け靜を圍ひ、ふんぢかつて立たるは、心地よくこそ見へにけれ。藤「ヤア忠信殿、好い所へ能ふ見へた」と、悅べば逸見の藤太、「扨は忠信好き敵、搦捕つて高名せん」と、ばら〳〵と追取まく。忠「ヤアしほらしいうんざいめら、ならば手柄に搦て見よ」と、云せも立ず双方より、「捕た」とかゝるを引外し、首筋摑んでゑいやつと、右と左へ筋斗打せ、隙間もなく後より、大勢拔き連切てかゝれば、「心得たり」と拔合せ、茅花の穗先と閃めく刀を、飛鳥のごとく飛越踏ね越へ駈け廻り眉間鶻薙廻れば、わつと計に逃退たり。おくれて逃る逸見の藤太が、素首つかんでどうど投、足下に蹈へ、忠「汝等が分際で、此鼓を取んとは、胴より厚きつらの皮、打破つてくれんず」と、ぼん〳〵と踏みのめせば、ぎやつと計を最後にて、其儘息は絶果たり。烏居の本の木陰より、義經主從かけ出く〳〵、「珍らしや忠信」と、仰を聞よりはつと計、「こは存じ寄らぬ見參」と、飛しさつて手をつけば、龜井駿河武藏坊、互に無事を語りあふ。忠信かさねて頭を下げ「先は變らぬ君の尊顏、拜し申て抽者も安堵、某も母が病氣見舞の爲お暇給はり生國出羽に

ふんぢかつて―踏みはだかりて

しほらしい云々―感心な二才め

茅花の穗先―多くの刃先を淺茅の叢出するに譬ふ

罷下り、永々の介抱、程なく母も本復致し、罷登らんと存る中、君腰越より追返され、鎌倉殿御兄弟、御中不和と承はるより、取物も取敢へず、都へ歸る道すがら、土佐坊君の討手と聞、夜を日に次いで堀川の、御所へ今晩駈付しに、早都を開かせ給ふと、聞より是迄御跡慕ひ、思ひがけなき靜樣の御難義を救ひしは、我存念の屆きし所」と、申上れば御悅喜有、義「我も當社へ參詣して、今の働委しくも見屆けたり。鎌倉武士に刃向ふな、と堅く申付たれど、土佐坊討れし上からは、其家來を忠信が討たる迚構ひなし。今に始めぬ汝が手柄、連々。取分て兄次信も、我矢面に立て討死したるは、稀代の忠臣、其弟の忠信なれば、我腹心をわけしも同前。今より我姓名を讓り、淸和天皇の後胤、源の九郎義經と名乘、まさかの時は判官に成かはつて敵を欺き、後代に名をとどめよ。是は當座の褒美」迚、家來に持たせし御著長、忠信にたびければ、はつと計に押戴き、頭を土にすり付く、忠「土佐坊づれが家來を追ちらせしと有て、御著長を下し賜はる其上に、御姓名迄賜はるは、生々世々の面目、武士の冥加に叶ひし」と、天を禮し地を拜し悅び涙にくれければ、判官重て、「我は是より九州へ立越、豐前の尾形に心を寄ん。汝は靜を同道して都にとどまり、萬事宜しく計へ」と、君は靜に別れを惜み、「便もあらば

矢面に立て―矢の來る方の麓護となりて

著長―大將の鎧をいふ

音信れん。さらば〳〵」と立給へば、「今が誠の別か」と、立寄る靜を武藏坊龜井駿河立隔て、押隔つれば忠信も、我君に暇乞、互に無事を默き合、歎く靜を押退々々、心強くも主從四人、山崎越に尼が崎、大物差して出給ふ。靜「コレなふ暫し待てたべ」と、行を制し留むれば、御行方を打守り、「御顏ばせを見るやうで、戀しいはいの」と、地に平伏、正躰もなく泣ければ、忠「ヲヽ道理々々。去ながら、別も暫し此鼓、君の筐と有からは、君と思ふて肌身に添、憂さを晴させ給へや」と、下し給はる御琴長、ゆらりと肩に引かたけ、宥め〳〵て手を取ば、靜はなく〳〵筐の鼓肌身に添、盡ぬ名殘に咽かへり、涙と俱に道筋を、たどり〳〵て　三重行空の、夜毎日毎の入船に、濱邊賑ふ尼が崎、大物の浦に隱なき渡海屋銀平、海をかゝへて船商賣、店は碇帆木綿、上下りの積荷物、運ぶ船頭水主の者、人絶のなき船問屋、世をゆるかせに暮しける。夫は積荷の問屋廻り、内をまかなふ女房おりう、宿かり客の料理旅、所柄迎網の物、鹽辛な鹽梅も、甘ふ育ちし一人娘、お安がついの轉寐に、風ひかさじと裾に物。奥の襖をぐはらりと明、風呂敷わいがけ旅の僧、によき〳〵と立出れば、「是はマア〳〵お客僧樣、今御膳を出しますに、何處へお出なさるゝぞ」詞されば〳〵、西國への出日和待て、連共もほつと退屈。只居よりは西町

世をゆるかせに―世を氣樂に

裾に物云々―裾に着物を置くと奥の襖にかく

へ往て、買物をして來ませう」りう「是は〳〵殘り多い。外のお客へは鳥貝鱠、御出家には精進料理、分だつて拵へたに、終あがつてござらぬか」「イヤ〳〵愚僧は、山伏成ば精進せぬ。鳥貝鱠よかろぞや」りう「夫でもお前、今日は二十八日で不動樣の御緣日」雪「ほんにそふぢや、大事の精進。ハテなんとしよ、しよ事がない、往てきませう」とふいと立、「あいた〳〵〳〵」りう「ハアお客、僧樣何となされた」雪「イヤ別のことでもないが、寐て居るは爰のお娘か、此子の上を踏越へたれば、俄に足がすくばつて。ヱ、聞へた、小さうても女子なれば、虫が知らしてしやきばつた物で有。ヤア大降のせぬ中に、往て來ませう」と武藏坊、ばつてう笠引冠り、何處ともなく急ぎ行。母は娘の傍に寄、「コレお安、其樣に轉寐して、風ひいてたもるなや」と、抱き起せば目を擦り〳〵、安「ヲ、母樣、お前のなさるゝ事見て居て、ついとろ〳〵と一寐入」母「ヲ、夫ならば目を覺して、今朝習ふた淸書を、とつくりと能ふ書いて、父樣のお目にかきや」と、子には目のなき親心、手を引納戸に入にける。かゝる所へ誰共しらぬ鎌倉武士、家來引具し、「亭主に逢ふ」と内に入れば、女房驚き走り出、「夫は他行、何の御用」と尋れば、「身は北條が家來相摸五郎といふ者、此度義經尾形を賴、九州へ逃下るとの風聞によつて、鎌倉殿の仰を請、主人

分だつて―特別に

しよ事がない―致方なし

すくばる―足がすくみて動かぬ

次のしやきばるも同じ、此娘は後にある安德帝なれば辨慶天罰を受けたるなりばつてう笠―菅笠

時政の名代として、討手に只今下れ共、打つゞく雨風にて、船一艘も調はず。幸此家に借置たる船、日和次第出船と聞ー願ふ所なれば其船、身共が借請、艪を押切て下らんず。旅人あらばほいまくり、座敷を明て休息させい。早ふ〳〵」と權威を見せて延し上れば、女房ははつと返答に、當惑しながら傍に寄、「御大切な御用に、船がなうて嘸御難義。手前のお客も二三日以前より、日和待して御逗留。今更船を斷いふて、お前の御用にも立がたし。殊に先樣も武士方なれば、御同船共申されず。何とぞ御了簡有て、今夜の所をお待なされて下さらば、其中には日和も直り、何艘も〳〵、入船の中を借調へて上ませう」相「默れ女。逗留がなれば儕等には云付ぬ。所の守護へ權付に云付る。奥の侍が怖ふて、おのらが口から云憎くば、身共が直に云べい」と、ずんど立袂にすがり、りう「おせきなさるは御尤なれ共、お前を奥へやりまして、直に御相對さしましては、船宿の難義。何分夫の歸らるゝ迄、お待なされて下され」と、手を擦り詫れど、相「ヤアしちくどい女郎奴。奥の武士に逢さぬは、察する所平家の余類か、義經の所縁の者。家來ぬかるな、油斷すな」と、留むる女房を刎退突退、又取つくをあらけなく、踏倒し蹴倒すを、戻りかゝつて見る夫、走り入て彼侍が手を取て、「眞平御免下さるべし。則私

艪付に―權柄を以て

わが女房―汝が女房

反―刀の反にて扳かけるさま

武―戈と止の合字

此家の亭主渡海屋銀平。御立腹の樣子、我等に仰下さるべし」と、膝を折手をつけば、相「ムウ儕亭主なら、云て聞さん。身は北條の家來なるが、義經の討手を蒙り、奥の武士が借たる船、此方へ借らん爲、奥へ踏込、身が直に其武士に逢ふといへば、わが女房がさへぎつて、留むる故に今此時宜」銀「ヘヱ憚りながら、そりやお前が御無理な樣に存られます。何故と仰しやりませ。人の借て置た船を、無理に借らふとおつしやりますは、ナア御無理じやござりませぬか。其上にまだ、宿かりの座敷へ踏込ふとなされたを、やらんとおつしやつて女房共を、踏だり蹴たりなさるゝは、お侍樣には似合ませぬ樣に存じます。此家に一夜でも宿致しますれば商旦那樣。座敷の中へ蹈込しましては、如何も私がお客人へ立ませぬ。何うぞ御了簡なされて、お歸りなされて下さりませ」相「イヤ素町人め、鎌倉武士に向つて、歸れとは推參。是非奥へ蹈ん込」と、反打ちかへしてひしめけば、銀「アヽお侍樣、それはお前の御短氣でござりましよ。私も船問屋はして居ますれど、聞はつゝておりますか、惣別刀脇指では、人切物じやないげにござります。お侍樣方の二腰は身の要害、人の麁忽狼藉を防ぐ道具じやとやら承はりました。去によつて、武士の武の字は戈を止むるとやら、書きますげにござります」相「ヤア小癪な奴

め、嘲る頬げた切裂かん」と、抜打に切付る。引外して相撲が利腕むとずと取、銀「コリヤもふ了簡がならぬはい。町人の家は武士の城郭。敷居の内へ泥濡を切込さへ有に、此刀で誰を切。其上に平家の余類の、イヤ義經の所縁なんどと、旅人を威嚇のか。よし又判官殿にもせよ、大物に隱なき、眞綱の銀平がおかくまひ申たら何とする。サア眞綱がひかへたならば、びく共動いて見よ。素頭微塵にはしらかし、命を取楫此世の出船」と、刀もぎ取宙に引提持て出、門の敷居にもんどり打たせば、死入計の痛をこらへ、頬をしかめて起上り、相「亭主め、能く覺へて居よ。此返報には、うぬが首さらへ落す。覺悟せよ」銀「また顯げた叩くか」と、「庭なる碇をぐつと指上、微塵になさんと投付れば、暴風に遭ふたる小船のごとく、尻に帆かけて主從は、跡を見ずして逃げ失ける。銀「ホヽウ好いざまく」と、烟草盆引寄せ、「何と女房、奥のお客人も今のもやくや、お聞なさつたで有ふな」と、女夫が私語く咄し聲、漏れ聞へてや、一間の襖押開き義經公、旅の艱苦に窶れ果たる御容顔、駿河龜井も跡にしたがひ立出る。「こは存よりなや」と、夫も俄に膝立直し、夫婦諸共手を下れば、義「隱すより顯はるゝはなし、と兄賴朝の不興を請、世を忍ぶ義經、尾形を賴み下らんと、此所に一宿せしに、其方よくも量知て、時政が家來を追退け、今の難義を救ふたるは、業

はしちかし―飛ばし
もんどり―とんぼかへり
もやくやーゴタゴタ

かいわい―界隈
附近
體將軍―家で威張るだけのもの

に似ぬうい働き。我一の谷を貰し時、鷲の尾といへる木樵の童に、山道の案内させしに、山樵には剛なる者故、武士となして召つかひしが、それに勝つた汝が働き。あつぱれ昔の義經ならば、武士に引上召つかはんに、有に甲斐なき漂泊の身」と、武勇烈しき大將の、身を悔みたる御詞。駿河龜井も諸共に、無念の拳を握りける。銀「是はく有難い御仰。私も此かいわいでは、眞綱の銀平迚、人に知られて居ますれど、高が町人、今日の働きも畢竟、申さば竈將軍。些細な事がお目にとまつて、我〳〵連に御褒美の御詞、冥加に余る仕合せ。殊に君を見覺へ奉るは、八島へ赴き給ふ時、渡邊福島より兵船の役にされ、拙者が手船も御用に達し、一度ならず此度も、不思議のお宿を仕るも深き御緣。去によつて、お爲を存申上たきは、北條が家來取てかへさば御大事。一刻も早く御乘船然るべし」と、いひもあへぬに駿河次郎、「我々も其心。此天氣にて御出船は如何有んん」銀「アア夫をぬかつてよござりましよか。弓矢打物はお前方の業、船と日和を見る事は舟問屋の商賣。昨日今日は辰巳、夜半には雨も上り、曉方には朝嵐にかはつて、御出船には引抜の上々日和。數年の功にて見置た」と、見透す樣にいひけるは、其道々としられける。龜井六郎ずんど立、「ヲ、銀平出かしたり。其方が詞に付て雨の晴間に片時も早く、主君

の御供仕らん」と、申上れば義經公、「船中の事は銀平が宜しく計ひ得させよ」と、仰にはつと頭をさげ、「只今も申通り、幼少より船の事はよく鍛錬仕れば、御見送の爲拙者も手船で、須磨明石の邊迄參らん。元船の有所は五町余り沖の方、舟は則ち日吉丸。思ひ立日が吉日吉祥、我も雨具の用意を致し、跡より追付奉らん。女房君を御見立申せ」と、云捨納戸に入ければ、妻は心得御身をば、隱れ蓑笠參らする。「ヲ、心遣忘れじ」と、龜井駿河諸共に、蓑笠取て被せ參らせ、二人も手早く紐引しめ、「いざせ給へ」と主從三人、打連立て濱邊に出、兼て用意の艀に召給へば、兩人も飛乘り〳〵、「サア〳〵船頭仕れ」と、もやひ解けば女房、門送して舟場に下り、「御武運目出度まし〳〵て、御緣も有ば重ねて御目にかゝるべし。さらば〳〵」に艪を押立て、沖へ出船女房は、いきせき内へ入相時、「ア、心せかれや」と、火燧ならして油さし、神棚おうへに灯をてらし、「娘〳〵お安〳〵」と呼出し、「暮方に手習もおきやらいで。今夜は父樣、侍衆を元船迄送つてなれば、和女も寐る迄奚に居や。ほんに主とした事が、千里萬里も行樣に身拵へ、もふ日も暮た、用意がよくばいかしやんせ」と、呼べどぐつ共、答なし。若畫の草臥で、轉寐では有まいか、「銀平殿〳〵」と呼立れば、銀一謠抑、是は桓武天皇九代の後胤、平の知盛の幽靈なり。渡

もやひ―繋い舟のともづな
入相時―夕方にて入るにかくもうへ―入口を入りて圍爐裏のある廣間

すゝどきー鋭き

海屋銀平とは假の名、新中納言知盛と、實名を顯はす上は、恐れあり」と娘の手を取、上座に移し奉り、「君は正しく八十一代の帝、安德天皇にて渡らせ給へど、源氏に世をせばめられ、所詮勝べき軍ならねば、王體は二位の尼抱奉り、知盛諸共海底に沈みしと欺き、某供奉して此年月、お乳の人を女房といひ、一天の君を我子と呼、時節を待し甲斐有て、九郎大夫義經を今宵の中に討取、年來の本望を達せんは、ハアア悅ばしや嬉しやな。典侍の局も悅ばれよ」と勇める顏色、威有て猛く、平家の大將知盛とは、其骨柄に顯はれし。典「扨は常々の御願ひ、今夜と思し立給ふな。わきて九郎はすゝどき男子。仕損じばしし給ふな」知「ヲヽ、夫にこそ術有り。北條が家來相摸五郎といひしは、我手下の船頭共。討手と僞り狼籍させ、某義經に方人の體を見せ、心をゆるさせ、今夜の難風を日和と僞り。船中にて討取術なれ共、知盛こそ生殘つて、義經を討たんなりと沙汰有ては、末々君を御養育もならず、重ねて賴朝に仇も報はれず。さるによつて、某人數を手配り、艀にて跡より追付き、義經と海上にて戰はゞ、西海にて亡びたる平家の惡靈、知盛が怨靈なりと雨風を幸に、彼等が眼を眩ません爲、我形も此ごとく、怪しく見する白糸威。此白柄の長刀にて、九郎が首取立歸らん。勝負の合圖は、大物の沖に當つて、挑

燈松明一度に消なば、知盛が計死と心得、君にも御覺悟させまし、御骸見苦しなき樣に」帝「ヲヽ跡氣づかはずと、好き奏を知らせてたべ。知盛早ふ」と勅。知「こは有がたし」と龍顏を拜し申せばおとなしき　八つの太鼓も御年の、數を象る相圖のしらせ、知「早お暇」と謠ゆふ浪に、長刀取直し、巴波の紋あたりを拂ひ、砂を蹴立て、早風につれて、眼をくらまし、飛がごとくに三重かけり行。跡見送つて典侍の局、御傍に差寄つて、「今知盛のおつしやつたを、能ふお聞なされたか。稚けれども十善の君、此さもしき御姿にては、軍神への恐れ有、御裝束」と立上り、ささかの時は諸共に、冥途の旅の死裝束と、心に籠めし納戸口、涙隱して入りにける。夜も早次第に更渡り。雨風はげ敷聞ゆれば、「今頃は知盛の難義仕やらん。いとほしや」と、ねびさせ給へば只管に、案じ詫びたる御氣色。程なく局は、山鳩色の御衣冠、恭しく臺に載せ、其身も俱に衣服を改め一間を出、「片時も早く御裝束」と御傍に立寄、賤の上著を脱かへて、下の衣上の衣、御衣冠に至る迄、召さしかゆればあてやかに、始の御姿引きかへて、神の御末の御粧ひ、いと尊くも見へ給ふ。典「サア是からは知盛の吉左右を待つ計」と、そよとの音も知らせかと、胸とどろかす太鼓鐘。すはや軍眞最中と、君のお傍に引添て、知らせを今やと待折から、

奏―左右
八つ―帝の御年と時大鼓とかく
ねび―大人び
山鳩色の御衣―天子所用の黃櫨染の袍

知盛の郎等相摸五郎、息つきあへず馳付ば、「樣子は如何に、早う聞かせよ〳〵」と、局もせきにせき立たり。相「されば豫の術の通り、暮過より味方の小船を乘出し〳〵、義經が乘たる元船間近く漕ぎ寄しに、折しも烈敷武庫山颪に、連て降くる雨雷、時こそ來れと水練得たる味方の勢、皆海中に飛込々々、西國にて亡びし平家の一門、義經に恨をなさんと、聲々に呼はれば、敵に用意やしたりけん、挑燈松明ばら〳〵と、味方の船に乘移り、爰を先途と戰へば、味方の駈武者大半討れ、事危く見へ候。某は取てかへし、主君知盛の御先途を見屆けん」と、申すもあへずかけり行。與「サア〳〵大事が發つて來た。さるにても、知盛の御身の上氣遣はし。沖の樣子は如何ならん」と、一間の戸障子押明れば、挑燈松明星のごとく、天を焦せば漫々たる、海も一目に見へ渡り、數多の小船遣り違へ遣り違へ、船矢倉を小楯に取、敵も味方も入亂れ、舟を飛越刎こへて、追つ捲つゝえい〳〵聲にて切結ぶ、人叢迄もあり〳〵と、戰ふ聲々風に連、手に取やうに聞ゆるにぞ、「あれ〳〵御覽ぜ。あの中に知盛のおはすらん」帝「やよいづくに」と伸上り、見給ふ中に挑燈松明、次第々々に消失て、沖もひつそとしづまれば、是こそ知盛の討死の相圖かと、余り靭れて泣かれもせず、途方にくれて立たる所に、入江の丹藏朱に成て立歸り、「義經

主從手いたく働き、味方殘らず討死、まつた主君知盛も、大勢に取まかれ、既に危く見へけるが、かいくれに御行方知れず、必定海に飛込で、御最期と存れば、冥途の御供仕らん」と、云もあへず諸肌くつろげ、持たる刀腹に突立、汐の深みへ飛込ば、典「ヤア扨は知盛もあへなく討れ給ひしか。はつ」と計にどうど伏し。前後も知らず泣ければ、君も見る事聞事の、悲しさ怖さ取まぜて、俱に涙にくれ給ふ。局は歎の中よりも、君を膝に抱き上、御顏つくづくと打守り、典「二歲餘りは此見苦しき荒屋を、玉の臺と思し召ての御住居。朝夕の供御迄も、下々と同じ樣にさもしい物。夫さへ君の心では、殿上にての榮花共思ふてお暮しなされしに、知盛お果なされては、賤が伏屋に御身一つ、置奉る事さへも、ならぬ樣に成果て、終には此浦の土と成給ふかや。上もなき御身の上に、悲しい事の數々が續く續けば續く物かいの」と、くどき立〳〵身も浮く計歎きしが「アヽよしなき悔みごと。御覺悟急がん」と、涙ながら御手を取、泣く〳〵濱邊に出れど、いと尋常なる御姿、此海に沈めんかと、思へば目もくれ心もくれ、身もわな〳〵とぞ顫ひける。君はさかしくましませど、死る事とは露知り給はず、「コレなう乳母、覺悟々々といふて何國へ連て行のじやや」典「ヲヽそふ思し召は理り。コレ能ふお聞遊ばせや。此日本には

かいくれに―向に

さもしい―まづいい

な、源氏の武士はびこりて、恐ろしい國。此波の下にこそ極樂淨土といふて、結構な都がござります。其都には祖母君二位の尼御を始め、平家の一門知盛もおはすれば、君も其處へ御幸有て、物憂世界の苦しみを、まのがれさせ給へや」と、宥め申せば打しほれ給ひ、帝「あの恐ろしい波の下へ、只一人行のかや」典「ア、勿體ない。此お乳が美しう育上たる玉體を、あのなん〳〵たる千尋の底へ遣りまして、何と身も世も有れふぞ。此お乳もお供する。いとし可愛の育ひ君、何とお一人やられふぞ」帝「夫なら嬉しい。そなたさへ往きやるならば、何國へなり共往くわいの」典「ヲヽ能ういうて給はつた」と、引よせ引よせ抱しめ「火に入水に弱るよも、前の世の約束なれば、未來の誓まし〳〵て、天照大神へ御暇乞」と、東に向はせ參らすれば、美しき御手を合せ、伏拜み給ふ御有樣、見奉れば氣も消々、「ヲヽ能ふお暇乞なされたのふ、佛の御國は此方ぞ」と、指さす方に向はせ給ひ、帝「今ぞ知る御裳川の流には波の底にも都有とは」と、詠じ給へば、典「ヲヽお出かしなされた。能ふお詠遊ばした。其昔月花の御遊の折から、斯樣に歌を詠給はど、父帝は申に及ばず、祖父淸盛公、二位の尼君、取わけて母門院樣、なんぼう悅び給はんに、今はの際に是がまあ、いふに甲斐なき御製や」と、かきくどき〳〵、涙の限り聲限り、歎き

たん〳〵たる―漫々たるなどの意なるべし

恒河の鱗―無數の魚類

大童―髪をぼうぼうにする

くどくぞ道理なる。局は涙の隙よりも、御髪搔き上搔き撫て、「今は早、平家極樂への御門出を急がん」と、帝をしつかと抱上て、磯打波に裳を浸し、海の面を見渡し〳〵、「いかに八大龍王、恒河の鱗、安德帝の御幸なるぞや、守護仕給へ」と、うづまく波に飛入んとする所に、何時の間にかは九郎義經、駆寄て抱留給へば、典「なう悲しや。見赦して死せてたべ」と振返つて、典「ヤア此方は」義「聲立な」と帝を小脇に引抱へ、局の小腕ぐつと捻上、無理無躰に引立々々、一間の内に入給ふ。かゝる所へ知盛は、大童に戰ひなし、鎧に立矢は蓑毛のごとく、威も朱に染なして、我家の内に立歸れば、跡を慕うて武藏坊、表の方に立聞共、しらず知盛聲を上、「天皇はいづくにまします。お乳の人典侍の局」と、呼はり〳〵どうと伏、「ヱ、無念口惜や。是程の手に弱りはせじ」と、長刀杖に立上り、「お乳の人我君」と、よろほひ〳〵かけ廻れば、一間を踏明九郎判官、帝を弓手の小脇にひん抱、局を引付突立給へば、知「あら珍らしや、いかに義經、謡思ひぞ出る浦浪に、知盛が沈みし其有樣に、又義經も微塵になさん」と、長刀取直し、「サア〳〵勝負」と詰寄ば、義經少しも騷ぎ給はず、「ヤア知盛さなせかれそ。義經がいふ事有」と、帝を典侍の局に渡し、しづ〳〵と歩み出、義「其方西海にて入水と僞り、帝を供奉し此所に忍び、一門の仇を報

氣つかはれそ—
氣遣し給ふな

はんとは遑々〳〵。我此家に逗留せしより、竝々ならぬ人相骨柄、察する所平家の落人。辨慶に云含め、帝を探る計略、過つて踏越へしに、果して武藏が五躰のしびれ。其上我に方人の躰を見せ、心をゆるさせ討取術。我其事を量知り、艀の船頭を海へ切込、裏海へ船を廻し、疾より是へ入込で、始終委しく見屆け、帝も我手に入たれ共、日の本をしろしめす萬乘の君、何條義經が擒にするいはれあらん。一旦の御艱難は、平家に血を引給ふ故。今某が助け奉つたり迚、不和なる兄頼朝も、我誤りとはよも云ふまじ。必々帝の事は氣づかはれそ知盛」と、聞嬉しさは典侍の局、「ヲヽあの詞に違ひなく、先程より義經殿、段々の情にて、天皇の御身の上は、知邊の方へ渡そふと、武士の堅い誓言。悅んでたべ知盛卿」と、聞に凝つたる氣も逆立、局を取て突退、知「ヱヽ無念口惜や。我一門の仇を報はんと、心魂を碎きしに、今夜暫時に術顯はれ、身の上迄知られしは天命々々〳〵。まつた義經、帝を助奉るは、天恩を思ふ故、是以て知盛が、恩にきるべきいはれなし。サア只今こそ汝を一太刀亡魂へ手向ん」と、痛手によろめく足踏しめ、長刀押取立向ふ。辨慶押隔、打物わざにて叶ふまじと、珠數さら〳〵と押揉んで、「いかに知盛、斯有んと期したる故、我も今朝より船手に廻り、計略の裏をかいたれば、最早惡念發起せよ」と、

いちたか―粒の平たく四角なる數珠　四姓―源平藤橘

持つたるいらたか知盛の、首にひらりと投げかくれば、知「ムヽ扨は此珠數をかけたのは、知盛に出家とな。エヽ汚らはしく。抑四姓始つて、討ては討れ、討れて討は源平のならひ。生かはり死かはり、恨をなさで置べきか」と、思ひ込だる無念の顏色、眼血ばしり髪逆立、此世から惡靈の相を顯はす計なり。かくと聞より龜甲駿河、「主君の身の上氣遣し」と、追々かけ付取廻せば、御幼稚なれども天皇は、始終の分ちを聞し召、知盛に向はせ給ひ、「朕を供奉し、永々の介抱は其方が情、今日又丸を助けしは、義經が情なれば、仇に思ふな知盛」と、勿體なくも御涙を、浮め給へば典侍の局、俱に涙にくれながら、「チヲ能ふおつしやつた。何時迄も義經の志、必忘れ給ふなや。源氏は平家の仇敵と、後後迄も此お乳が、帝樣にあだし心も付ふかと、人々に疑はれん。さあれば生てお爲にならぬ。君の御事くれぐも、賴み置は義經殿」と、用意の懷劍咽に突立、名殘惜げに御顏を、打守りく、「さらば」と計を此世の暇、あへなく息はたへにける。思ひ設けぬ局の最期、君は猶更知盛も、重なる憂目に勇氣も碎け、暫し詞もなかりしが、天皇の御座近く、涙をはらくと流し、知「果報はいみじく、一天の主と產れ給へ共、西海の波に漂ひ、海にのぞめ共、汐にて水に渴せしは是餓鬼道、ある時は風波に遣ひ、お召の船を荒磯に

西海の波云々―此六道物語は平家物語の最後の文を取れり

よろぼひーヒヨロ〳〵して

吹上られ、今も命を失はんかと、多くの官女が泣さけぶは、阿鼻叫喚、陸に源平戰ふは取もなほさず修羅道の苦しみ、又は源氏の陣所々々に、數多駒の嘶くは畜生道、今いやしき御身となり、人間の憂艱難、目前に六道の苦しみを請たまふ。是といふも父淸盛、外戚の望有によつて、姫宮を御男宮といひふらし、權威をもつて御位に即け、天道をあざむき、天照大神に僞はり申せし其惡逆、積り〳〵て一門我子の身にむくふたか、是非もなや。我かく深手を負たれば、存へ果ぬ此知盛、只今此海に沈んで、末代に名を殘さん。大物の沖にて判官に怨をなせしは、知盛が怨靈なりと傳へよや。サア〳〵息ある其中に、片時も早く帝の供奉を、賴む〳〵」とよろぼひ立てば、義「ヲヽ、我は是より九州の尾形方へ赴くなり。帝の御身は義經が、何國迄も供奉せん」と、御手を取て出給へば、龜井駿河武藏坊、御跡に引添たり。知盛莞爾と打笑て、「昨日の怨は今日の味方、あら心安や嬉しやな。是ぞ此世の暇乞」と、ふり返つて龍顏を、見奉るも目に涙、今はの名殘に天皇も、見返り給ふ別れの門出、留る此方は冥途の出船、三途の海の瀨踏せんと、碇を取て頭にかづき、さらば〳〵も聲計、渦卷波に飛入て、あへなく消たる忠臣義心、其亡駭は大物の、千尋の底に朽果て、名は引汐にゆられ流れ〳〵て、跡しら波とぞ成にける。

出端―茶の入れたて
端香云々―五六歳の子持と思へば興がさめる
枝もりや―若葉の序にもけり
忍褌―負ふにかく
陀羅輔―野老にて製したる腹痛の藥

第三

歌　三芳野は丹後武藏に大和路や、わけて名高き金峯山、藏王彌勒の御寶物、御開帳辻野も山も、賑ふ道の傍に、茶店構へて出端汲む、青前垂の入端は、女房盛の器量よし、五ツか六ツの男の子、傍に付添嘸樣と、いふで端香もさめにけれ。枯れ残る身はいとど猶、枝をりや、若葉の内侍若君は、主馬の小金吾武里が、嵯峨を遁れて維盛の、若や高野と志ざし、旅の用意の小風呂敷、脊に忍海吉野なる下市村に著けるが、若君六代痃疚になやみ給へば、小「幸」の茶店暫く床几へお休み」と、内侍を誘ひ、其身も脊負し包をおろし、小「お茶」と指圖に　女房「あい〳〵」と、愛相こぼれて指出す。内侍はつく〴〵見給ひ、「こりや此方も子持よの。自も連合の忘れ筐を伴ひしに、道よりなやみて貯し、藥を殘らず飲きらし俄の難義。子持つた者は相身互、嗜あらば所望したし」と仰に女房、「夫はまあいかゐ御難義。私が子は生れてより、腹痛一つおこしませねば、何の用意もござりませぬ。ハテそれは氣の壽や。イヤ申ほんにそれ〳〵、幸此村の寺の門前に、洞呂川の陀羅輔を請賣人がござりますれば、お供の前髪樣、つい一走り」小「イヤ〳〵身共は當所不

わやく半分―冗戯半分
榧―とるかやにかく
道草―道で手間とる
ほがち―中のうつろ

案内、太義ながら其方調へてくれまいか」女房「ナヽそれもお安い事。わたしが調へて來て上ませう。善太留主仕や、但は行か」「おれも」と慕ふ子を連て、器量よければ心迄尊い寺の門前へ、藥を買に急行。「ハテ心よい女中や」と内侍は見やり、「コレ六代、爰に大分木の實が有が、拾ふて遊ぶ氣はないか。金吾が拾ふが大事ないか」と、いさめの詞に引立られ、「おれも拾を」と若君の、病もわやく半分の、起立給へば内侍も倶々、「サアサア拾を」「イヤ拙者めが」と小金吾が、甘に近い大前髪、大人氣ないも若君の、機嫌取る榧栃の實を、拾ひ集むる折柄に、若き男の草臥足、是も旅立風呂敷包、脊負てぶらぶら茶店を見付け、「どりや休んで一服」と、包をどつかり床几におろし、「御免なりませ火を一つ」と、烟草吸付、「コリヤ皆樣方は開帳參でござりますか。和子樣は道草か。わしらが在所の子供と違ひ、御奇麗な生れ付や」と、譽めても吐ししかけても、心置身はそこ〳〵に、詞數なく拾ひ居る。暫く休んで彼の男、「コレ〳〵、其落た木の實は虫入で、見かけがよふても皆ほがら、木に有をお取なされ」といふに、金吾は、「こな男、何をいふ二丈余りの高木、かけ上る蹴爪は持たぬ」男「サそれを心安ふ取やうがござります」小「そりやどうして」男「さらば鍛錬お目にかけふ」と、小石拾ふて打礫、枝に當つてばら〳〵。

若君悦び悩みも忘れ、「小金吾ひらへ」の御機嫌に、内侍も嬉しく、「ヲヽ好い事してもらやつた。過分々々」と一禮も冥加に余ると知らざりし、旅の男は自慢顔、「何と手の内御覽じたか。まそつと打て進ぜたいが、遠道かゝへお伽申ても居られず。我等は參る」と、包を脊負、「御緣有ば重て」と、いふて其場を行過る。小金吾木の實を拾ひ仕廻、「サア是で堪忍なされ。扨々今の男は氣轉者」と、見やる床几の風呂敷包、同じ色でもどこやらが、違ふた樣なと走り寄、内改むれば覺なき、しかも是は張皮籠、こちは衣類の藤行李。「扨は木の實に氣を奪はせ、取かへ失せたか、但しは麁相か。何にもせよ、追かけて取かへさん」とかけ出す所へ、向ふよりあたふた戻る以前の男、「麁相いたした、御免々々」といひつゝ包指出し、「日暮もちかし、心はせく、同じ色の風呂敷故、重い輕いに氣も付ず、取ちがへた麁相、道にてふつと心付、取てかへしてお詫言。眞平御免下され」と、顔に似合ぬ手すりたいぼう。小金吾は胸落付、「麁相と有れば云分もおりないが、萬一紛失の物有と赦さぬが合點か」男「何が扨、相違有らば臺座の別れ。御存分になされませ」小「ムウ其一言なら疑ふに及ばね共、中改めて請取ん」と包をひらき、改め見れば相違もなし。「實に麁相に極まつた、申分なし。其方の荷物も持ておいきやれ」と、床几に殘る風呂敷

あたふた—慌てて

手すりたいぼう—慇懃者　ありない—ござちぬ

臺座の別—頭を斬られる

包、渡せば請取不思議顔、「此中括の解けたは」「イヤそれは最前變つた樣には思へども、もしやとちよつと見た計」と、いふ間に開く張皮籠、引ちらけて袷の袖、浴衣の間を撰し見て、恟り仰天。箇打ふるひ、「こりやどふじや。コリヤ無いは、無いは〳〵」と、きよろきよろ目玉、小「何がない、何見へぬ」と傍も氣の毒目をくばれば、兼て工みのいがみ男、腕まくりして、「コレ前髪殿。此皮籠の中に、人に賴れて高野へ上る祠堂金、廿兩入置た。コリヤくすねたな〳〵、サア出した〳〵、サ出しやいの」と、取てもつかぬ難題に、小金吾むつと反打かけ、「此奴下郎め、武士に向つて何がなんと。今一言云て見よ」と、きつさうかはれどびく共せず、「盜人たけ〴〵しいと、其高ゆすりくはぬ〳〵。赤鰯をひねりかけ、威嚇して此場をぬけるのか。ほろうまい、そんな事春永になされ。わづか廿兩で首綱のかゝらぬ中、四の五のいはずに出した出した」と、もがりいがみの强請者、小「モウ堪忍が」と拔かけしが、お二方の姿を見て、じつとこたへて胸撫おろし、「コレサ若い人、そりや其元の覺へ違ひ。見らるゝ通り足弱をお供したれば、縱何萬兩落散つて有ても、目をかける所存はなし。とくと其方を吟味召れ」と、いはせも果ず、男「コレ其足弱連たが盜する付目じや。よもやと思はせ、仕てあるが當世の流行物。何萬兩は入ぬ、たつ

箇―行李

祠堂金―社寺建築の寄附金

くすねた―竊れた 掠取る

赤鰯―鈍刀

春永に―日が永くなつて暇な時にせよ、嘲弄の詞

あり樣―もの前まへ
あたゝまる―儲ける
ふけちす―他人へ渡す

た二十兩」小「スリヤどふしても身が盗んだとな」男「ハテしれた事」小「ムウして其盗んだ證據は」男「コレ此皮籠の中紐何故解いた。あり樣の荷物に紛失が有と赦さぬといふたではないか。理詰じやぞや、出しやいの〳〵」と、せり詰られて小金吾も、「もふ是迄」と抜放す。内侍はあはて抱きとめ、「尤じや道理ぢや。短氣な事を仕やつては、わしも此子も俱に難義。無念に有ふと堪忍して、あの者のいふ樣に、了簡付てやつてたも。足弱連たを災難と思ひ、胸をしづめてたもいの」と、涙にくれての給ふにぞ、血氣にはやる小金吾も、見るに忍びず、「世が代の時でござらふなら、ずた〳〵に試しても、厭き足らぬ奴なれ共、何をいふても茅花の穂にも怯る身の上、御意の通りに致しましよ。ヘエヽ口惜ふござりまする」と、こなたは大事の二方を、お供の身なれば無念を堪へ、奥齒嚙む程つきあがり、「廿兩といふ金、あたゝまつて置て、其頼何じや。ホウ怖いは〳〵、此赤鯝で切か　此目で嚇すか。前髪を一筋づつ抜くぞよ。但しもふ金はふけらしたか、連の女郎から穿鑿」と、弱みへかゝるを、首筋つかんで引戻し、用意の路金いふ程出して睨付、小「大切なお方をお供した故、衒取るゝ廿兩。持てうせい」と、打付れば、衒のならひ金見ると、目に佛なく手ばしかく、拾ひ集めて耳讀み揃へ「テモ恐ろしい此金を、那智若衆め

ひじり取―かたり取、聖は那智の儀にていふ

わつぱさつぱ―わや〳〵

きぬきせて―一層思くして

にすつての事、ひじり取らりよと致した」と滅ず口、「其顕を」と立寄金吾を、内侍は押へ、「事ない中」と若君引連れ、立出給へば是非もなく、跡に引添小金吾も、無念をこたへ上市の、宿有方へと急ぎ行。「譬百度睨まれても、一度が一歩にや付きやせまい。うまい仕事」と喉の權太、金懐に押入て、盆屋へ急ぐ向ふへずつと、茶屋の女房が立ふさがり、「コレ權太殿、こりや何處へ」權「ホ小せんか。わりや店明て何處へいた」小仙「わしや旅人のお頼で坂本へ薬を買いに」權「ヲそりやよい手筈。われが居たら又邪魔しやうに、外して居たでまし〳〵」と、いふ胸ぐらを取て引する、小仙「コレこなたに衒さす氣で外しては居ぬぞや。最前戻りかゝつた所に、わつぱさつぱ。指出たら衒の正銘顯はれ、どんな事にならふも知れぬと、あの松影から聞て居た。ヘエヽこなさんは恐しい工みする人じや。姿は產め共心は生まぬと、親御は釣瓶鮓屋の彌助の彌左衛門樣といふて、此村で口も利お方。見限られ勘當同前、御所の町に居た時こそ道も隔たれ、跡の月から同じ此下市に住でも、嫁か孫かとお近付にもならぬはの、皆此方樣の心から。喉の權にきぬきせて、衒の權といはうぞや。此善太郎は可愛ないか。博奕の資本が入ならば、此子やわしを賣て成と、重て止て下さんせ。何の因果で其樣な、恐ろしい氣にならしや

つた」と、取付き歎けば突飛し、「ヤア引きさかれめが、又してはよまい言。おれが盗衒の根元は、皆うぬから發つた事」小仙「ホこりや大それた事。聞ねばならぬ。そりや又どふして」「どふしてとは覺へが有ふ。おりや十五の年元服して、親父の云付で御所の町へ鮓商、隱し女の中に傍が振袖、見込だが鱶。鱶程寢入佛師達の、臍くりを盗出し、店の溜德居先、身體半分仕廻ふて遣つたナ聞へたか。所で親父がほり出した。無理な和郎の。其時因果と此餓鬼が腹に有て、親方はねだる年貢米を盗んで立銀、其尻が來て首が飛のを、庄屋の阿呆が年賦にして、毎日の催促。其金濟そで博奕にかゝり、出世して小强請衒。此中も親父の所の家尻を切て見たれど、妹のお里めと内の男めが、夜通しの鼻聲で、とんとまんが損ねた。又今日のまんのよさ。此勢に母の鼻毛をゆすりかけ、二三貫目忍じめてくる。酒買て待ておれ。善太よ、日の暮から寢おんな。ヲヽ夜通しせねばおれが商賣は讓られぬ」と、云つゝ立ば女房取付、「まだ此上に親御の物迄瞞し取とは勿體ない。マア内へ戻つて下され」と、縋れど聞ず刎飛すを、「コリヤやい善太よ、留てくれ」と、母の教に利口者、「父樣内へ、サアござれ」と、手に纏ひ付蔦葛、子が跡追ば惡者は、小手縛迚うたてがる。しかも血筋の糸繩で、きびたが惡い出なをそ

引きさかれ—女を罵る詞
德居—得意
身體—身代
濟そで—濟さうといふので
まん—運
鼻毛をゆする—だましかける
寢おんな—寢ること勿れ
きびた—意味

ほて一手といふに同じ

木の葉一散る

と、鬼でも子には引さるゝ。攤「テモ冷いほでじや」と手を引て、女房諸共立歸る。夕陽西へ入折から、主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が、追手の人數に取まかれ、數ヶ所の疵を負ながら、内侍若君御供申し、一先都へ立歸るを、跡につゞいて數百人、遁さぬやらぬと追かけたり。手疵は負共氣は鐵石の、武里が死物狂と思ひの刃、爰に三人彼處に七人、はらり〳〵と三重薙倒し、其身は秋の花紅葉、敵は木の葉の其跡へ、追手の大將猪熊大之進、おくればせにかけ來り、「ヤア死損め何處へ行。先頃嵯峨の奥にて取逃し、主人朝方公の御機嫌以の外、すご〳〵館へ歸られず、庵坊主めに白狀させ、付廻したる此海道。サア維盛の御臺若君を渡し、腹かつさばけ」と呼はつたり。手負は流るる血汐をぐつと一飲息をつぎ、「主馬の判官が朔小金吾武里、息有中はいつかな〳〵」猪「チ其一言が絶命」と踊上つて討太刀を、てうど請とめ、はつしと反ね、ひらりと見せてはくるりと外し、手練を盡せど遁は手負。内侍若君、あぶ〳〵ひや〳〵、小石を拾ひ砂打付、及び越なる加勢も念力。手強く見ゆる猪熊が、眼に入て目當は暗闇、透間に切込太刀に、眉間をわられて頭轉倒。乘かゝるを下よりも、突く鋒は豁骨、金吾ものつけに反り返る。あなたが起きれば石礫、猪熊切れ小金吾も、俱に深手の四苦八苦、修羅の街

ぞ危けれ。忠義の天成小金吾が、難なく相手を取て押へ、ぐつと突込とどめの刀、サア仕負せし嬉しやと、思ふ心のたるみにや、うんと其身も倒れ伏。ノウ悲しやと内侍若君勞り抱抱起し、「コレなう金吾々々、氣をはつきりと持てたも。其方が死で自や、此子は何と成物ぞ。情なや悲しや」と、泣入給ふ御聲の、耳に通つて手負は顔を上、「コレ内侍樣六代樣、諦めて下さりませ。心はやたけにはやれ共、もふ叶はぬ。我君維盛樣は、兼て御出家のお望、熊野浦にて逢奉りしといふ者有故、高野山へと心ざし、お二方をお俱したれど、中々此手では一足も行れず。コレ若君樣、能ふお聞遊ばせや。御臺樣を伴ひ、紙屋の宿といふ所に、内侍樣を殘し、お前は人を賴んで山へ登り、父樣のお名は云れぬ、今道心の御出家と尋てお逢遊ばせ。西も東も敵の中、平家の公達と悟られぬ樣、お命目出度う御成人の後、憚りながら金吾めが事、思し召出されなば、一滴の水、一枝の花、それが則冥途へ御知行。御成長待ております、お名殘惜しいお別れ」と、いふもせつなき息づかひ、六代君は取縋り、「死でくれな小金吾。其方が死ると、父樣に逢事がならぬは」と、泣入給へば内侍はせき上、「アレ聞てたも、子心でも其方一人を力にする。維盛樣に逢迄は、死まいぞ〳〵と何故思ふてはたもらぬ。御一門は殘らず亡び、廣い世

界を敵に持、何時迄存へ居られふぞ。倶に殺してたもいの」と歎き給へば、理と、手負はいとど涙にくれ、「先君小松の重盛樣は日本の聖人、若君は其孫君。諸神諸菩薩の惠のない事もござりますまい。末賴を思し召て、必短氣をお出しなされな。あれ〳〵向ふへ挑燈の火影。又も追手の來るも知れず。若君伴ひ此場を早々」御臺「イヤ〳〵深手の其方を見捨置て、いづくを當に行物ぞ。死ば倶に」と座し給へば、小金「ヱヽ腑甲斐ない、六代樣は大事にないか、此手で死る金吾めではござりませぬ。聞入なければ直に切腹」御臺「コレ待てたも、夫程に迄思やるなら、成程先へ落ませう。必死んでたもるなや」小金「お氣づかひ遊ばすな。運に叶ひ跡より參ろ」御臺「必待て居るぞや」と、云ふ間も近付く挑燈の、火かげに恐れ是非なくも、若君連れて落給ふ、御心根の悼はしさ。手負は御跡見送り見送り、死ぬと申せしは僞り、三千世界の運借ても、何の此手で生られませふ、内侍樣六代樣、是が此世のお別でござりますと、思ふ心も斷末魔、知死期も六つの暮過て、朝の露と消にける。程なく來る挑燈は、此村の五人組、何やらざはく〻咄し合、山坂の別れ途に、庄屋作が立留り、「コレ彌助の彌左衞門殿、貴樣は鮮商賣故、念押上におしかける。今云付た鎌倉の侍は、聞及んだ蚰。何やらこなたの耳を甜つて兀る程いひつけたら、畏

知死期―息を引取る時
念押上云々―念押す上に問ひかける、押すは酢の緣
蚰―毒虫にて甜れは兀るといふ俗說を利用せり

もつけ＝幸

つた〳〵と、滅多無性に請合たが、何と覺の有事かや」彌「ハテ知た事。此方衆も常からおれが性根を知らぬか、血を分た躰でも、見限つたら門端も踏さぬ彌左衛門、膝ぶしが碎けても、畏つたら痺も切らさぬ。したが跡からのいひつけがもつけ。嵯峨の奥から逃げて來た、子を連た女と大前髪、此村へ入込だと追手からの知らせ、所で蚰殿が甜りかけて、捕へたら褒美と有」庄「こりや又格別よい仕事。皆も油斷をせまいぞや。ヲそれそれ、こんな時こなたの息子の、喧の權太を頼んで置ふ」と五人組、山道行ば彌左衛門、坂へおりしも行先の、手負にばつたり行當り、はつと飛退氣味悪ながら、挑燈振上そろ〳〵立寄、「テモむごたらしう切たは〳〵。旅人そふなが、追剝の所爲ならば、丸裸にしそふな物。路銀を當に悪者の所爲か」と、悪い子を持親の身は、案じ過して、「コレ〳〵手負殿々々々」と、呼も答もなき骸に、「扨は最早息絶たか。いとしや何國の人なるぞ。見れば ふけた角前髪、袖振合も他生の縁。なむあみだぶつなむあみだなむあみだぶつ」と回向して、兎角浮世は老少不定、哀れを見るも佛の異見、人は喧まず眞直に、後生の種が大事ぞと、思ひつゞけて行過しが、何思ひけん立どまり、取つ置つの俄の思案、そろりそろりと立戻り、邊り見廻し〳〵て、抜身を拾ひ取るより早く、死首ぱつしと打落し、挑

燈吹消し首引提げ、「忝い」と彌左衛門、直成る道も横飛に、我家をさして三重立歸る。

歌 春は來ね共花咲かす、娘が漬た鮒ならば、なれがよかろと、買ひにくる、風味も吉野下市に、賣弘めたる鈎瓶鮒、御鮒所の彌左衛門、留主の内にも商賣に拔目もない義が早漬に、娘お里が片綿襷、裾に前垂ほや〳〵と、愛に愛持鮎の鮒、押へてしめてなれさする、味い盛の振袖が、鈎瓶鮒とは物らしょ。しめ木に栓を打込で、桶片付けて、「申嚊樣、昨日父樣の云しやるには、明日の晩には、内の彌助と祝言さす程に、世間晴て女夫になれとおつしやつたが、日が暮ても、お歸りないは啖かいな」母「ヲあの言やる事はいの。何の啖であろぞ。器量のよいを見込に、熊野參から連て戻つて、氣も心も知ると、彌助といふ我名を讓り、主は彌左衛門と改めて、内の事任せて置しやるは、和女と娶あはす兼ての心。今日は俄に役所から、親父殿を呼に來て、思はぬ際入、迎に遣ろにも人はなし」里「サイナ折惡う彌助殿も、方々から鮒の誂。仕込の桶がたるまいと、明桶取にいかれました。もふ戻らるゝでござんしよ」と、噂半へ明桶荷ひ、戻る男の取なりも、利口で伊達で色も香も、知る人ぞしる優男、娘が好た厚鬢に、冠著せても憎からず。内へ入間も待兼ねて、お里は嬉しく、「アレ彌助樣の戻らんした。待兼た遲かつた。若や何處ぞ

吉野—よしにかく
内義—ないにかく
嚊樣—母樣
知ると—知ると
取なり—風つき
色も香も云々—古今集君ならで誰にか見せん云云の歌をとる

へ寄てかと、氣が廻つた案じた」と、女房顔して言うて見る。流石鮓屋の娘迚、早い馴とぞ見へにける。母はにこ〳〵笑を含み、「彌助殿氣にかけて下さんな。此吉野郷は、辨才天の教へによつて、夫を神共佛共、戴いて居よと有天女の掟。其かはり程悋氣も深い。又有樣は親の孫、瓜の蔓にではござらぬ」と云くろむれば、彌「是はまあ却つて迷惑。段々お世話の上、大切なお娘御迄下され、お禮の申やうもござりませぬ。さりながら、兎角お前には、彌助殿々々々と殿付をなされて、さり迚は氣の毒。やつぱり彌助どふ爲い斯う爲いと、お心安ふ、ナ申」母「イヤ〳〵それは赦して下され」彌「そりや又何故でござりますへ」母「さればいの、彌助といふ名は、是迄連合の呼名。殿付せずに、どふ爲い斯う爲いとは、勿體なふて云憎い。云馴れた通り、殿付さして下され」と、實に夫をば大切に、思ふ掟を幸に、娘へ是を聞けがしの、母の慈悲とぞ聞へける。お里彌助は明桶を、板間へ竝べて居る所へ、此家の惣領、喰の權太、門口より乙聲で、「母者人々々々」と云つゝ入れば、お里は惘り、「又兄樣か、よふお出」と揉手する。權「きよと〳〵しい其頬何じや。能う來たが惘りか。わりや彌助と味い事して居るそふなが、コリヤ彌助もよふ聞。今追出されて居ても、釜の下の灰迄おれが物。今日は親父の毛虫が、役所へ往たと聞たに

親の孫云々―瓜の蔓に茄子が出來ぬ如く娘も親の血統を受けて悟氣深しとなり

箸片端―箸一本

よつて、少母者人にいふ事が有て來た。二人ながら奥へ失せふ」と睨廻され、うじ〳〵と、「是に」といふて立彌助、娘も跡に引添て、一間へこそは入にけれ。跡に母親溜息つき、「コリヤ又留守を考へ無心に來たか。性懲もない椀白者。其儕が心から、嫁御有ても、足ぶみ一つさす事ならぬ。聞きや此村へ來て居るげなが、互に知らねば摺合ても、嫁姑の明盲目、眼つぶれと人々にいはれるが面目ない。ヘエヽ不孝者め」と目に角を、立かはつたる機嫌にぐんにやり、直ではいかぬと哇の權太、思案しかへて、「申 母者人、今晩參つたは無心ではござりませぬ。お暇乞に參りました」母「ソリヤ何で」權「私は遠い所へ參ります程に、親父様もお前にも、隨分お健でお健で」と、しほれかければ母は驚き、「遠い所とはそりや何所へ。如何した譯で何しに行」と、根問は親のだまされ小口。サアしてやつたと目をしばたゝき、「親の物は子の物と、お前へこそ無心申せ、終に人の物箸片端、曲んだ事も致しませぬに、不孝の罰か、夜前わたしは大盜人に合ました」母「ヒヤア」權「其中に代官所へ上る年貢銀、三貫目といふもの盜取れ、云譯もなく仕樣もなく、お仕置に合ふよりはと、覺悟極めておりまする。情ない目に合ました」と、かます袖をば顏に當、しやくり上ても出ぬ涙、鼻が邪魔して目の緣へ、とゞかぬ舌ぞうらめしき。甘い中にも

鬼神に云々―諺、神は正直を先出かしたまだよかつた

ほつとり―スツカリ

地獄の種―未來は地獄に墮つる種になる三貫目の盜金

あたふたと―驚き慌てゝ

分けて母親、實と思ひ共に目をすり、鬼神に横道なしと、年貢の銀を盜れ死ふと、覺悟はまだ出かした。災難に遭ふも親の罰。能ふ思ひ知れよ」櫂アイ〳〵、思ひ知つてはおりますけれど、どうで死ねば成ますまい」母「コリヤやい」櫂「あい〳〵」母「常の儕が性根故、是も衒かしらね共、しやうぶ分にと思うた銀、親父殿に隱してやろ。是でほつとり根性直せ」と、そろ〳〵戸棚へ子の影で、親も盜をする母の、甘い錠さへ明け兼る。櫂「つい雁首でこち〳〵が、よござりまする」と仕馴れたる、おのが手わざを敎ゆる不孝。親は我子が可愛さに、地獄の種の三貫目、跡をくろめて持て出、「何ぞに包んで遣りたいが」と、限りない程甘い親。「味いわろじや」と啞の權太、鮓の明桶よい入物、是へ〳〵と親子して、銀を漬けたる黃金鮓、蓋しめ栓しめ、「サアよいは。是で目立ぬ、提げて往ね」と、親子が工合の最中へ、苦い爺親彌左衞門、是も疵持足の裏、あたふたとして門口を、「戻つた明い」と打ちたゝく。「南無三親父」と、内には轉倒狼狽廻り、「其桶を爰へ〳〵」と明桶と、俱に竝べて親子はひそ〳〵、奥と口とへ引別れ、息を詰てぞ入にける。父「なぜ明けぬ〳〵」と頻にたゝけば奥より彌助、走りて戸を明る。内入惡く傍りを見廻し、父「コリヤ又何奴も寢ておるか。云付た鮓共は仕込で有か」と、鮓桶を提たり明たりぐ

はつたく。「コリヤ思ふ程仕業ができぬ。女房共やお里めは何しておるぞ」「イヤ只今奥へ。呼ましよ」と行彌助をば引とゞめ、内外見廻し表をしめ、上座へ直し手をつかへ、「君の親御小松の内府重盛公の御恩を請たる某、何卒御子維盛卿の御行衛を、思ふ折から熊野浦にて出合、御月代をすゝめ、此家へお供申たれ共、人目を憚り下部の奉公。餘りと申せば勿體なさ、女房計に子細を語り、今宵祝言と申も、心は娘を御宮仕へ。彌助彌助と賤しき我名をお讓り申たも、彌助くるといふ文字の緣義。人は知らじと存ぜしに、今日鎌倉より梶原平藏景時來つて、維盛卿をかくまひ有と、退引させぬ詮義。烏を鷺と云拔ては歸れども、邪智深い梶原、若や吟味に參ろもしれずと、心工は致して置共、油斷は怪我の基、明日からでも我隱居、上市村へお越あれ」と、申上れば維盛卿、「父重盛の厚恩を請たる者は幾萬人、數限りなき其中に、お事が樣な者あらふか。昔はいか成者なるぞ」と、尋給へば彌私めは平家御代盛りの折柄、唐土硫黃山へ祠堂金お渡しなさるゝ時、おんどの瀨戸にて三千兩の金盜取れ、役目の難義、切腹にも及ばん所、有難いは重盛樣、日本の金唐土へ渡す我こそは、日の本の盜賊と、御身の上を悔み給ひ、重て何の祟もなく御暇を下され、親里へ立歸つて出緒ある鮓商賣、今日を安樂にくらせ共、

硫黃山―育王山

殿もふけ―夫を持つ事

しんきーじれったい

貞女兩夫云々―王蠟の言

躰權太郎めが盗衒、殺生の報ひぞと、思ひ知つたる身の懺悔、お恥しうござります」と、語るにつけて維盛も、榮華の昔父の事、思ひ出され御膝に、落る涙ぞいたはしき。娘お里は今宵待、月の桂の殿もふけ、寐道具抱へ立出れば、主ははつと泣目を隱し、爻「コリヤ彌助、今云聞かした通り、上市村へ行事を必々忘れまいぞ。今宵はお里と爰にゆるり。嗚とおれとは離座敷。遠いが花の香がなふて、氣樂に有ふ」と打笑ひ、奥へ行くのも娘は嬉しく、「テモ粹な父さん。離座敷は鄰しらず、餅つきせうと。ヲおかし。こちらは爰に天井抜、寢て花やろ」と蒲團敷く。維盛卿はつくゞくと、身の上又は都の空、若葉の内侍や若君の、事のみ思ひ出されて、心も濟ず氣も浮ず、打しほれ給ひしを、思はせぶりとお里は立寄、「コレナこれなア、ヲしんき。何初心な案じてぞ。二世も三世も堅の枕、二つ竝べた。此方や寐よ」と、先へころりと轉寐は、戀の艮とぞ見へにけり。維盛枕に寄添給ひ、「是迄こそ假の情、夫婦となれば二世の緣。結ぶにつらき一つの云譯、何を隱さふ某は、國に殘せし妻子有。貞女兩夫にま見へずの掟は夫も同し事、二世のかためは赦して」と、流石小松の嫡子迚、解けたやうでも何處やらに、親御の氣風殘りける。神ならず佛ならねばそれぞ共、しらぬ道をば行迷ふ、若葉の内侍は若君を、宿有方

に預け置、手負の事も賴んと、思ひ寄身も緣のはし、此家を見かけ戸を打ちたゝき、「一夜の宿」と乞給へば、維盛はよい退しほと表の方、叩く扃に聲を寄、「此内は鮓商賣、宿屋ではござらぬ」と、愛相のないが愛相と成、内「イヤ是申、稚を連た旅の女。是非に一夜」と宣ふにぞ、斷いふて歸さんと、戸を押ひらき月かげに、見れば内侍と六代君、はつと戸をさし内の樣子、娘の手前もいぶかしく、そろ〳〵立寄見給へば、早くも結ぶ夢の體、表に内侍は不思議の思ひ、今のはどふやら我夫に、似たと思へど形容、頭も靑き下男、よもやと思ひ給ふ中、戸を押ひらいて維盛卿、「若葉の内侍か六代か」と宣ふ聲に、内「ヒヤア扨は我夫」六「父樣か」二人「ナウなつかしや」と取縋り、詞はなくて三人は、泣より外の事ぞなき。「先々内へ」と密に伴ひ、維「今宵は取わけ都の事、思ひ暮して居たりしが、親子共に息災で不思議の對面。去ながら、某此家に居る事を誰しらせしぞ。殊に又はるばるの旅の空、供連ぬも心得ず」と、尋給へば若葉の君、「都でお別れ申てより、須磨や八島の軍を案じ、一門殘らず討死と、聞悲しさも嵯峨の奥、泣てばつかり暮せしに、高野とやらんにおはするといふ者の有故に、小金吾召連お行衛を心ざす道、追人に出合、可愛や金吾は深手の別れ、賴も力もない中に、廻り逢たは嬉しいが、三位中將維盛樣が

早くも結ぶ夢―も里は早餘入りたり

ゆるかしきーゆつくりした

此お姿は何事ぞ。袖の無い此羽織に、此お頭は」と取付て、咽び絶え入給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手を當袖を當、伏沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君、伏たる娘に目を付給ひ、「若い女中の寐入ばな、殊に枕も二つ有、定めてお伽の人ならん。斯ゆるかしきお暮しなら、都の事も思し召、風の便も有べきに、打捨給ふは胴慾」と恨み給へば、維「ホヲヽ、夫も心にかゝりしかど、文の落ちる恐れ有。わけて此家の彌左衛門、父重盛への恩報じと、我を助けて是迄に、重々厚き夫婦が情。何がな一禮返禮と、思ふ折から娘の戀路、つれなくいはゞ過あらん、却つて恩が仇なりと、假の契は結ぶ共、女は嫉妬に大事も洩すと、彌左衛門にも口留して、我身の上を明さず、仇な枕も親共へ、義理に是迄契りし」と、語り給へば伏たる娘、堪へ兼しか聲上てわつと計に泣出す。「コハ何ゆへ」と驚く内侍、若君引連逃のかんとし給へば、「ノウこれお待下され」と、涙と共にお里はかけ寄、「先々是へ」と内侍若君上座へ直し、「私はお里と申て、此家の娘、徒者憎いやつと、思召れん申譯。過つる春の頃、色めづらしき草中へ、繪に有やうな殿御のお出。維盛樣とは露しらず、女の淺い心から、可愛らしいいとしらしいと思ひ初たが戀のもと。父も聞へず母樣も、夢にも知らして下さつたら、譬焦れて死れば迚、雲井に

氣の毒の一下に涙の字を略す

せしめてくれん
一捕へてやろう

近き御方に、鮓屋の娘が惚られふか。一生連添殿御じやと、思ひ込で居るものを、二世の堅は叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預りました」とどうど伏、身をふるはして泣ければ、維盛卿は氣の毒の、内侍も道理の詫涙、かはく間もなき折柄に、村の役人駈來り、戸をたゝいて、「コレ〳〵、爰へ梶原樣が見へまする。内掃除しておかれい」と、云捨て立歸る。人々はつと泣目も晴、如何はせんと俄の仰天。お里はさそくに心付、先々親の隱居屋敷、上市村へと氣をあせる。繼實其事は彌左衞門、我にも教へ置しかど、最早開かぬ平家の運命、檢使を引請潔ふ腹かき切ん」と身拵、内侍は悲しく、「コレ此若の幼氣盛を思し召、一先爰を」と無理やりに、引立給へば維盛も、子に引さる後髪、是非なく其場を落給ふ、御運の程ぞ危けれ。樣子を聞いたか喧の權太、勝手口より踊出、「お觸の有た内侍六代、維盛彌助めせしめてくれん」と、尻引裏げ駈出すを、「コレ待て」とお里は取付き、「兄樣是は一生のわたしが願ひ、見赦して下され」と、賴めど聞ず跳ね飛し、「大金になる大仕事、邪魔ひろぐな」と縋るを蹴倒しはり飛し、最前置し銀の鮓桶、「是忘れては」と引提げて、跡を慕ふて追て行。「ノウ父樣母樣」と、お里が呼聲彌左衞門、母も駈出で、「何事」と問へば娘は、「コレ〳〵〳〵都から維盛樣の御臺若君、尋漂

ひお出有り、積る咄しの其中へ、詮議に來ると知らせを聞、三人連て上市へ落しましたを、情ない、兄様が聞て居て、討取か生捕て、褒美にするとたつた今、追つかけて」といふよりびつくり彌左衛門、「ソレ一大事」と、嗜の朱鞘の脇差、腰にぼつこみ駈け出す向ふへ、ハイ〳〵〳〵と矢筈の挑燈、梶原平藏景時、家來數多に十手持たせ、道をふさいで、「ヤア老悖め何處へ行。逃る迚逃さふか」と、追取まかれてはつと吐胸、先も氣ばかひ、爰も遁れず、七轉八倒心は早鐘、時に時撞くごとくなり。「ヤア此奴横道者、傍に今日維盛が事詮議すれば、存ぜぬ知らぬと云ぬける、其儘にして歸せしは、思ひ寄ず踏込ふ爲。此家に維盛かくまひ有事、所の者より地頭へ訴へ、早速鎌倉へ早打、取物も取あへず、來れ共、油斷の體は、おのれを取逃すまい爲。サア首討て渡すか　但違背に及ぶか　返答せい」と責付られ、叶はぬ所と胸をすへ、彌「成程一旦は匿ひないとは申たれども、余り御詮議強き故隱しても隱されず、早先達て首討たり、御覽に入んお通」と、伴ひ入ば母娘、どふ成事と氣遣ふ中、鮓桶提彌左衛門、しづ〳〵出て向ふに直し、「三位維盛の首、御受取下されよ」と蓋を取んとする所を、女房駈寄りちやつと押へ、「コレ親父殿、此桶の内には妾が少と大事の物を入て置た。此方さん明て如何するぞ」彌「ホ汝は知るまい。此桶に

矢筈―梶原の紋所

は、最前維盛卿のお首を討て入置た」女房「イヤ〳〵〳〵、此桶には此方に見せぬ物が有」と、引寄れば引戻し、蘭「儕が何にも知らぬ故」女房「イヤ此方が知らぬ故」と、妻は銀と心得て、爭ひ果ねば梶原平藏、「扨は此奴等言ひ合せ。縛れくゝれ」と下知の下、「捕た〳〵」と取まく所に、「維盛夫婦餓鬼奴迄、喧の權太が生捕たり討取たり」と呼はる聲、「はつ」と計に彌左衞門、女房娘も氣は狂亂、喧の權太は嚴めしく若君内侍を猿縛り、宙に引立目通りにどつかと引すゑ、「親父の賣僧が三位維盛を、熊野浦より連歸り、道にて天窓を剃りこぼち、青二才にして彌助と名を變へ、此間はほてくろしき聟穿鑿。生捕て頬恥と存じたに思ひの外手强い奴、村の者の手をかつて、漸〳〵と討取首に致して持參、御實檢」と指出す。權「ヲヽ成程、剃りこぼち彌助といふとは存じながら、先達て云ぬは彌左衞門めに、思ひ違ひを爲そふ爲。聞及んだ哦の權太、惡者と聞たが、お上へ對しては忠義の者、出來いた〳〵。内侍六代生捕つたな。ハテよい器量、夢野の鹿で思はずも、女鹿子鹿の手に入は、連の働き。褒美には親の彌左衞門めが命赦してくれふ」權「イヤ〳〵申親の命ぐらゐを赦して貰をと思ふて、此働きは致しませぬ」權「スリヤ親の命はとられても褒美が欲しいか」權「ハテあの和郎の命は彼の和郎と相對。私には兎角お銀」と顧へば

ほてくろしきーかたはちいたき

天窓を剃云々ー維盛の髻の總髪を剃りて月代を殘す

夢野の鹿ー鳴く鹿も夢の合せのまくになる

あの和郎ー親を罵る詞

梶原、「ハテ小氣味のよい奴、褒美くれん」と著せし羽織脱いで渡せば佛頂頰、「コリヤコリヤ、其羽織頼朝公のお召換へ。何時でも鎌倉へ持來たらば、金銀と鈎がへ、囑託の合紋」と、聞より戴き、櫂「出來た〳〵。當世衒が流行に依て、二重取をさせぬ分別。能ふした物」と引がへに、縄付渡せば請取つて、首を器に納めさせ、梶「コリヤ權太、彌左衛門一家の奴等、暫く汝に預る」櫂「お氣づかひなされますな、貧乏ゆるぎもさせませぬ」梶「ハテ扨健氣な男め」と、譽そやして梶原平藏、縄付引立て立歸る。櫂「ア、これ〳〵、其次手に褒美の銀、忘れまいぞ」と見送る透間、油斷見合せ彌左衛門、憎さも憎しと引だかへ、ぐつと突込恨の刃、うんとのつけに反りかへる。見るに親子は「ハッはつ」と憎いながらも悲しさの、母は思はず駈け寄て、「天命しれや不孝の罪、思ひしれや」と云ながら、先立物は涙にて、伏沈みてぞ泣居たる。彌左衛門齒噛をなし、「泣な女房、何吠へる。不便なの、可愛のといふて、こんな奴を生て置は、世界の人の大きな難義、門端も蹈ますなと云付置たに、内へ引入、大事の大事の維盛樣を殺し、内侍樣や若君を、能ふ鎌倉へ渡したな。腹が立て〳〵、涙がこほれて胸が裂る。三千世界に子を殺す親といふのはおれ計。遁手柄な因果者に、能ふ仕おつた」と拔身の柄、碎る計に握り詰、刹かけるも心

前髪―小金吾の首なればいふ惣髪―維盛の髪ある以前の姿にしてそれといはぬは―梶原が髪の事いはぬは彌左衛門の裏をかゝん巧み

は涙。いがみにいがみし權太郎、刃物おさへて、「コレ親父殿、何じやれ、こなたの力で維盛を助る事は叶はぬ〳〵」父「コリヤいふな、今日幸と別れ道の傍に、手負の死人、好い身代りと首討て戻り、此中に隱し置。コリヤ是を見おれ」と、鮓桶取て打明れば、ぐはらりと出たる三貫目、父「ヒヤアこりや銀じや。こりやどふじや」と、軈果たる計なり。手負は顔を打ながめ、「おいとしや親父樣、私が性根が惡さに、御相談の相手もなく、前髪の首を、惣髪にして渡さふとは、了簡違ひのあぶない所。梶原程の侍が、彌助といふて青二才の男に仕立有事を、知らいで討手に來ませふか。それといはぬは彼方も工み。維盛樣御夫婦の、路銀にせんと盜んだ銀。重いを證據に取違へた鮓桶、明て見たれば中には首。はつと思へど是幸、月代剃つて突付たは、やつぱりお前の仕込の首」父「ムウ其又根生で、御臺若君に繩をかけ、何故鎌倉へ渡したぞ」「ハ其お二人と見へたのは、此權太郎が女房躰」父「ヤアして〳〵維盛樣御夫婦、若君は何國に」「ヲヽ逢ませふ」と袖より出す一文笛、吹立つれば折よしと、維盛卿内侍は茶汲の姿となり、若君連てかけつけ給ひ、維「彌左衛門夫婦の衆、權太郎へ一禮を。ヤア手を負たか」と驚くも、彌「おかはりないか」と悔りも、一度に興をぞさましける。母は悲しさ手負に取付、「斯程正しき

性根にて、人に疎まれ譏らるゝ、身持はなぜにしてくれた。常が常なら連合が、むざと手疵も負せまい。むごい事を」とせき上て悔み歎けば權太郎、「ヤレ其お悔無用々々。常が常なら梶原が、身がはり喰ふては歸りませぬ。まだ夫さへも疑ふて、親の命を褒美にくれふ、忝いといふと早、詮義に詮義をかける所存、いがみと見た故汕斷して、一ばい喰ふて歸りしは、禍も三年と、惡い性根の年の明時。生れ付て諸勝負に魂奪はれ、今日もあなたを二十兩、衒取たる荷物の内に、恭敷高位の繪姿、彌助が顏に生寫し。合點がいかぬと母人へ、銀の無心を囮に入込、忍んで聞ば維盛卿、御身に迫る難義の段々、此度性根改めずば、何時親人の御機嫌に、預る時節も有まいと、打てかへたる惡事の裏。維盛樣の首は有ても、内侍若君のかはりに立る人もなく、途方にくれし折からに、女房小仙が躰を連れ、親御の勘當古主へ忠義、何狼狽る事が有、私と善太をコレ斯うと、手を廻すれば躰めも、嗅樣と一所にと、俱に廻して縛り繩、かけても〳〵手がはづれ、結んだ繩もしやらほどけ、哩がんだおれが直な子を、持たは何の因果じやと、思ふては泣しめては泣、後手にした其時の、心は鬼でも蛇心でも、こたへ兼たる血の涙、可愛や不便や女房も、わつと一聲其時に、血を吐ました」と語るにぞ、りきみ返つて彌左衞門、「出

禍も三年―諺、禍も三年立ては幸となる

しやらほどけ！すぐほどける

へぬぞよ權太郎、孫めに繩をかける時、血を吐程の悲しさを、常に持てはなぜくれぬ。廣い世界に嫁一人、孫といふのも彼奴一人、子供大勢遊んで居れば、親の顔を目印に、苦味のはしつた子が有かと、尋て見ては、コレ〳〵子供衆、權太が息子は居ませぬかと、問へど子供はどの權太、家名は何とと尋られ、おれが口からまんざらに、いがみの權とは得云ず、惡者の子じや故に、はね出されておるであろと、思ふ程猶そちが憎さ。今直る根性が、半年前に直つたら、ノウ婆々」母「親父殿、嫁女や孫の顔見覺へて置かふのに」父「ヲ、〳〵〳〵、おれもそればつかりが」と咽せ返り、わつと計伏沈む心ぞ思ひやられたり。内侍は始終御涙、維盛卿は身にせまる、いとど思ひにかきくれ給ひ、「彌左衞門が歎き、さる事なれ共、逢て別れ逢で死るも皆因緣。汝が討て歸りたる首は、主馬の小金吾迚、内侍が供せし譜代の家來。生て盡せし忠義は薄く、死て身がはる忠勤厚し。是も不思議の因緣」と語り給へば、彌「テモ扨も、そんなら是も鎌倉の、追手の奴等が皆所爲」維「ヲ、いふにや及ぶ、右大將賴朝が、威勢にはびこる無得心。一太刀恨ぬ殘念」と、怒りに交る御涙、「實お道理」と彌左衞門、梶原が預けたる陣羽織を取出し「是は賴朝が著替迚、褒美の合紋に殘し置し、寸斗々々に引裂ても、御一門の數には足ねど、一裂づつ

いふにや及ぶ―いふ迄もなし
無得心―無悔

晉豫讓―仇の趙襄子が贈りし衣を豫讓三たび刺しし話

御手向、サア遊ばせ」と指出す。維「何頼朝が著替とや。晉の豫讓が例を引、衣を刺て一門の、恨を晴さん思ひ知れ」と、御佩刀に手をかけて、羽織を取て引上給へば、裏に模様か歌の下の句、「内や床しき、内ぞ床しき」と、二つならべて書たるは「アラ心得ず。此歌は小町が詠歌、雲の上は有し昔にかはらねど見し玉簾の内や床しきと有けるを、その返しとて人も知たる此歌を、物々敷書たは不思議。殊に梶原は和歌に心を寄し武士、内や床しきは、此羽織の縫目の内ぞ床しき」と、襟際附際切ほどき、見れば内には袈裟衣、珠数まで添て入置いたは、「コリヤどふじや。コハいかに」と判れる人々。維盛卿「ホウ左もさうず、さもあらん。保元平治の其昔、我父小松の重盛、池の禪尼と言合せ、死罪に極まる頼朝を、命助けて伊東へ流人、其恩報じに維盛を、助けて出家させよとの、返か恩がへしか。ハア、敵ながらも頼朝はあつぱれの大將。見し玉だれの内よりも、心の内の床しや」と、衣を取つて。「是迚も、父重盛の御かげ」と、戴き給ふぞ道理なる。人々はつと悅び涙。手負の權太は這出揖寄、「及ばぬ智恵で梶原を、謀つたと思ふたが、あつちが何にも皆合點。思へば是迄術つたも、後は命を術るょ種としらざる淺ましし」と、悔みに近き終り際。維盛卿も、「是迄は、佛を術つて輪廻を離れず。離れる時は今此時」と、髷

左もそふず―さもあちん

伊東へ流人―伊豆の伊東へ流す

鸚鵡返―人よりいはれたる詞を其儘眞似て返事すること

ふつつと切給へば、内侍若君お里は縋り、俱に尼共姿をかへ、宮仕へを赦して」と、願へど叶はず打拂ひ〳〵、「内侍は高雄の文覺へ、六代が事賴まれよ。お里は兄に成かはり、親へ孝行肝要」と、立出給へば彌左衛門、「女中の供は年寄の役」と、諸共旅用意、手負をいたはる母親が、「ノウこれ難面親父殿、權太郎が最後も近し、死目に逢て下され」と、留るにせき上彌左衛門、現在血を分た躰を手にかけ、どふ死目に逢れふぞ。死だを見ては一足も、歩かるょ物かいの。息有内は叶はぬ迄も、助かる事も有ふかと、思ふがせめての力種。留る和女が胴欲」と、云て泣出す爺親に、母は取分娘は猶、不便々々と維盛の、首には輪袈裟手に衣、手向の文も阿耨多羅、三藐三菩提の門出、高雄高野へ引わくる、夫婦の別に親子の名殘、手負は見送る顔と顔、思ひはいづれ大和路や、芳野に殘る名物に、維盛彌助といふ鮓屋、今に榮ふる花の里、其名も高くあらはせり。

阿耨多羅云々―無上正等正覺と譯す

大和路―山にかく

忠と信―佐藤忠信をよす

第四

道行初音旅

歌 戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや。忠と信の武士に、君が情と預け

られ、靜に忍ぶ都をば、跡に見捨て旅立て、作らぬ形も義經の、御行末は難波津の、波にゆられて漂ひて、今は芳野と人傳の、噂を道の栞にて、大和路さしてしたひ行、野路も馴れぬ繁のまがひ道、弓手も馬手も若草を分つゝ行ば、あさる雉子のばつと立ては、ほろゝけん〳〵ほろゝうつ。汝は子ゆへに身を焦す　我は戀路に迷ふ身の、ァヽうらやましし、ねたましや、初鴈がねの女夫連、夫持顔の羽ばかま、人よりましの眞柴さす、宇賀御魂の御社は、いと尊くも神々と、霞の中にみかの原、わきて形見の鼓のかはい、〳〵かはいの睦言を、人にはつゝむ袱紗物、それを便りにつく杖も、心細野を打過て、見渡せば、四方の梢もほころびて、梅が枝うたふ歌姫の、里の男が聲々に、歌我つまが、天井ぬけてすへる膳、畫の枕はつがもなや　天井ぬけてすへる膳、ひるの枕はつがもなや。ヲヽつがもなや、おかし烏の一節に、人も藁屋の育にも、春は羽子つく、手鞠一二つくつくと聞ば、東風風音添へて、去年の氷を德若に、御萬歳と君も榮へまします、あいけう有や賴もしや。さぞな大和の人ならば、御隱家をいざとはん。我も初音の此鼓、君の榮へを壽て、昔を今になすよしもがな。歌谷の鶯ナ、初音の鼓〳〵、調べあやなす音に連て、つれてまねくさ、遲ばせなる忠信が旅姿、背に風呂敷をしかとせたらおうて、野道

靜に―都御前を義經―よしにかく

ほろゝけん〳〵―雉子の羽叩きと啼聲

みかの原―見ゆにかく

おかし烏―をかしがらせるにかく

德若―解くにかく

昔を今に云々―賤や賤の繕環くり返し昔を今になすよしもがな（醉）

せたらおうて―背負ひて

姓名添へて云々―源義經の名を添へて賜はりし御鎧沖の石―置くにかく、讃岐の歌をとる

丈六云々―一丈六尺の御像

畔道ゆらり〳〵、輕い取なりいそ〳〵と、目立ぬやうに道隔、思女中の足と侮つて、嘸お待兼。爰幸の人目なし」と、姓名添へて給はりし、御著長を取出し、君と敬ひ奉る。靜は鼓を御顏と、よそへて上に沖の石、顏、人こそしらね西國へ、御下向の御海上、波風あらく御船を、表具住吉浦に吹上られ、それより芳野にましますよし、頓てぞ參り候はん」と、互に筐を取納め、思ひに此鎧を給はりしも兄繼信が忠勤なり。八島の戰ひ我君の、御馬の矢面に、駒をかけすへ立塞がる。ヲヽ聞及ぶ其時に、平家の方には名高き強弓、能登守教經と、名乘もあへずよつぴいて、放つ矢先はうらめしや兄繼信が胸板に、たまりもあへず眞逆樣、あへなき最期は忠臣義死の名を殘す、思ひ出るも涙にて、袖はかはかぬ筒井筒、いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかは朽しかるべき」と、互に諫めいさめられ、急ぐとすれど捗らぬ、あし原峠かうの里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹拂ひ、雲と見まがふ三芳野の、麓の里にぞ三重著きにける。丈六忿怒の御像も、花に和らぐ吉野山、軒は霞にうづもれて、殊勝さ勝る藏王堂、櫻はまだし枝々の、梢淋しき初春の空、一山の衆徒評定始と、知行下の百姓等、お髭の塵取はき掃除、靈驗あらたな佛より、衆徒の罰をや恐れけん。名計は靜といへど急ぐ道、忠

信が介抱にて、義經の御跡を、漸〻爰にしたひ來て、彌生なかばと云ながら、見渡す景も吉野山百姓共口々に、「何と美しい京女薄花見にはまだ早いなァ」「何の花見で有ぞい。男と女と二人連。腹がはらみでせふ事なふ、ついとしてござつたか」と問ひかけられて、靜「ア、いやそんな者でなし。河連法眼殿へ用事有て參る者。是からとふいきます」と、皆迄聞ず早合點、耳「エ、込だ〳〵。妾奉公にやらしやるの。ヲ往かしやれば好い仕合せ。河連法眼樣といふは、此一山の衆徒頭、芳野中は立ふと伏ふと儘な上に、女房持て魚や鳥は喰次第。しだらく坊主の樣なれど、妻帶といへば格が重い。どふぞ首尾して仕合せさしやれ」靜「アこな樣は目高じやの。ガ其法眼樣には、大切なお客でもございますか」「イヤそんな事は知ませぬ。毎日琴三味線で賑やかなとは聞ました。コレ此道を斯往て、こつちやの方が子守明神、女の參らにやをらぬ所。夫より手前の一筋道、左の方につゐ見へる、大きな門の有所」と教に靜が、「あい〳〵〳〵、忝ふございます」と、氣のせく道をとつかはと、打連てこそ急ぎ行。早參會と喚鐘に、山科の法橋坊、無道不敵の一字を蒙り、荒法橋と名を呼ばれ、のつか〳〵と來る跡に、鬼と名乘は違はぬ惡者、梅本の鬼佐渡坊、返り坂の藥醫坊、清僧ながら大太刀帶、大口の裾踏みちらし、今日の評

込だ〳〵―吞込んだ

目高―目が高い

とつかは―急遽

大口―大口袴

のふぞ―不作法
のちかはくーなまけゐる

定眞先がけ、ない智惠ふるはん頼付なり。今迄のふぞな百姓共、逆様に這かゞめば、鬼佐渡傍を睨み廻し、「まだ掃除仕廻はぬな。先達て云渡すに、のらかはいて隙入る。年貢時分に待ておろ」と呵付られ、「ハイ〳〵〳〵」當り眼に、手ん手に箒どつさくさ、風上から掃廻せば、袈裟も衣も土ほこり、鼻ごくだうめら、こりや何仕おる」と呵る程猶遠慮なふ、「掃除します」と無二無三、埃かづけて迯歸る。爰に河連法眼とて、一山の檢校職、華美を好まぬ萌黄の法服、歩地を著たる指貫も、しめくゝより有仁體、「ホウいづれも早かりつ」と、互に前後の挨拶有、各圓座に列れり。やゝ有て河連法眼、「先達て回狀を以て申せし所、早々の參會、近頃祝著。今日の談合余の義に有ず」と、懷中より一通を取出し、「鎌倉殿の家臣我小舅、茨左衛門より斯の如き書狀到來。文言を讀聞さば、申さず共樣子は明白。先聞れよ」と押ひろげ、文面「飛札を以て申達す、九郎判官義經の事。弟の身として、舍兄頼朝追討の院宣を蒙り、剩へ土佐坊正尊を討取都を立退、大和路に徘徊の由、其聞有によつて、鎌倉殿御憤り大方ならず、早く討て出すべきの旨、國國へ配符を廻らし畢んぬ。討取て恩賞申請け奉るべく候。隱し置においては、一山の滅亡此時に候なり。正月十三日。河連法眼殿。茨左衛門判」迴聞れたかいづれも、談合

歩路―裾地
指貫云々―指貫袴の裾に括りある故心の締括あるにかく

仕置頭―取締長の法眼となり

どかと―一度に澤山

とは此事。元來科なき判官殿、大和路に徘徊と有ば、一山の衆徒を賴み來られんは必定なり。其時は旁賴まれ申て、匿ふ氣か、又は討て出す所存か。心々で濟ぬ事。銘々に遠慮なく評議有」と、聞もあへず荒法橋、「實尤、去ながら我々が評定お尋迄なく、一山の仕置頭、法眼殿から了簡を定め申さるれば、誰有て詞を背かず一黨せん。先御所存は」と問かへす。河「ホヽウ了簡は胸に有。まづ斯々と云聞さば、譬心に合ず共、よもやいやとは申されまじ。さ有ば却へつて不覺の基、我所存は跡で云ん。先各〳〵の思ふ所、眞直に申されよ」と、いへ共互に心置、暫し返答怠りしが、返り坂の藥醫坊、遠慮なくぬつと出、「先愚僧が存るは、義經を匿ふは、一年三年乃至十年、二十年其間立養ひ、獨計は僅でも、辨慶といふ喰拔の候へば、いか程喰ひ込んも知れず。と有つて匿ふまいといはゞ、彼辨慶滅相者、七つ道具の鋸で、家尻切んも知れず。どかと盗まれ申さんより、一山の出し前にて、茶粥をくはせ養ふが、勘定ならん」と申にぞ、法眼おかしく思ひながら、「ムウそれも肝要。扨兩人は」といはせもあへず、「されば〳〵、此事において勘定も何にも入ず。人を救ふが沙門の役。科なき義經かくまふ迚、鎌倉より討手來らば、忍辱の袈裟引かへ、降魔の鎧に身をかため、逆寄に押寄討取、直に鎌倉へ追上り、

御身に覺へなき條々、申開いて讒者原、一々に切ならば、夫も叶はぬ物ならば、理非辨へぬ賴朝を討取て。判官殿の天下とせん。我々が所存此通り。法眼殿の御了簡承はらん」と申ける。河「イヤ〳〵まだ申されぬ。法橋殿の御懇意有近頃の客僧、横川の禪師覺範、此場へ參り合さず、此了簡も聞ねば云れず。などや遲きぞ待久し」と、いふ間程なく山道を、しづ〳〵歩み來る法師は、名にし合たる横川の覺範。衣の纐高く取、三尺五寸の太刀帶反らし、末座にすはれど丈高く、僧柄勇々敷見へにける。「ヤア待兼し覺範殿、近ふ〳〵」と招き寄、法眼ずんど立上り、「コレ〳〵覺範、アレ見られよ。霞の中に朧なる、二つの山は妹兄山、是合體の歌名所。川を隔て西は妹山東は兄山、山は二つに別れたり。妹は妹、弟の義、兄山は元より兄賴朝、賴朝義經兄弟の、中吉野川引わかれし、姿は山に異ならず。されば歌にも流ては妹兄の山の中に落る吉野の川のよしや世の中と詠みたれば、世を捨人の我々でも、賴に引ぬか但し又、浪の白刃で討取氣か。手短き返答聞ん。申されやつ」と云ければ、思案に及ばずずつと立、打點いて、藏王堂に掛け奉る、奉納の弓と矢取て弦引し、「河連殿御覽有、手短き我返答。山と山との目通りに、立たる二木は勝負の目當、返答御覽」と弦打つがひ、かたむる迄なく發矢と放す、白矢は兄

山の印の木、根深にゆつて立たりけり。法眼きつと見、頼朝に准へたる兄の山に弓引れしは、頼朝に敵對て義經の味方よな。ムウ〳〵」と計以前の狀、ぐる〳〵卷て懷中し、「山科法橋梅本坊、藥醫坊も其通りや」皆一同に「義經の味方々々〳〵」と呼はれば、河「ムウそれならば法眼が所存も是にて明さん」と、同じく弓矢手に取上、引堅めたはいづれを的、どちらに付ぞと見る中に、かつきと放すは義經に、名ざす妹山弟の山、麥「ヤア扨は法眼頼朝方。義經に弓引るゝよな」河「いかにも落人に組せんより、世に連て一山の破滅にせぬが仕置の役目」麥「しかとそふや」河「イヤ覺範、味な所に念が入。義經此山を頼みなば、引かけて匿はれよ。金輪際此法眼、捜出して討つて見せう。其時は敵味方。無分別成衆徒原に、談合せし隙惜や。今日の參會是迄々々。さらば〳〵と」云捨に、駕を待ずして立歸る、所存の程ぞ訝しき。跡に鬼佐渡口あんごり、「アリヤ何の事、どふいふ事。云合せたは皆すまた。覺範はどふ思ふぞ」と、山科諸共尋れば、覺範ふつと吹出し、「其淺い了簡故、法眼が底意を知らぬ。今の詞でとつくりと、義經をかくまひ居る底の底迄皆知れた。法眼も我所存、義經の味方とは、唾と睨んで歸つた眼中。事延々に計はゞ、落しやらんも計られず、今宵八つの手筈を定め、夜討に入て討て取、鎌倉殿の恩賞に預れ方

あんごりーあんぐり
すまたー當はづれ

釋門の上り〳〵　佛法修行のひま
孫吳―孫子吳子
喚鐘―呼寄せる
合圖の鐘―亂調―亂打

いそふれ―急げ
天武の軍―壬申の亂

方。覺範が夜討の懸引催促を聞や〳〵」と、大木の朽根にどつかと腰打かけ、「我釋門のより〳〵に、孫吳が兵書諳じたり。我詞をあやまたず、荒法橋は下兜十騎余、燈籠が辻より一文字に、彼が館にひた〳〵と押寄て、喚鐘三つ四つ亂調せよ。鬼佐渡は又如意輪寺の裏の手を、眞直に六地藏の橋を引、敵逃くる時を待、さん〳〵に射て留よ。此覺範は新坊谷の坊に火をかけ、火を上て聖天山より、無二無三にかけちらして勝利を得ん。今夜の勝事手裏に有。いさめ〳〵」と云ければ、藥醫坊頭を打掉り、「それは味方の思ふ儘。敵強ふして荒法橋が、手勢を投退駈散らし、驀直に討て出、勝手の宮を陣所として、門をひつしと打ばいかに」「ホヽウ理にも咎めたり。其時は八王子金剛藏王の袖振る山、峯に上つて眞下りに、引詰指詰射るならば、其處もたまらず逃失ん」「ヲヽ其時は、まだ咲ぬ櫻の木隱れ枝隱れ、木の間〳〵の細道を、逃行先は天皇橋、大將軍の多寶塔、時に取ての角櫓、追くる衆徒を待かけて、射かくる矢先は扨いかに」「小ざかしょ荒法橋。何條射共落人が、持たる矢種は數知れたり、引ては寄寄ては引、矢種盡させ討取に、何の手間隙入べきぞ。恐れな音すな用意せよ。いそふれ旁其昔、天武の軍有し時、少女下つて舞奏づ、是反閇の始めなり。いざ勝軍の義を取て」踏々登路踏ならす、左に七足右

七足、左右合して十四足、はた〳〵はつしと踏治め、「サア行進」と逸散に、勇み足して立歸る、横川の禪師覺範が、勇氣稀なる　三重歌　鶯の、聲なかりせば雪消ぬ、山里いかで春をしらまし。春は來ながら春ならぬ、九郎判官義經を、御慰みの琴三味や、河連法眼が奥座敷、音じめも世上忍駒、柱に立る鴈がねも、春を見捨ぬ志、實賴もしきもてなしなり。今朝より他出の法眼、心に一物有顏に、悠々と立歸れば、妻の飛鳥は出向ひ、「ヲヲ異ない早いお歸り。今日の御評定、一山のお仕置か。但しは又奥のお客、義經樣の御事かは」と尋ねれば、河「ヲヽサ〳〵、義經の事共々々」妻「ムゝウ扨は吉野一山殘らず、お味方といふ樣な品にもや」河「成程々々衆徒の中にも、返坂の藥醫坊、山科の荒法橋、梅本の鬼佐渡等、別して横川の覺範、一ヂはな立て義經の味方といふは、我心を搜見ると知たる故、此法眼は鎌倉方と云放つて歸つたり」妻「ムゝウ鎌倉方とおつしやるは、衆徒の心をこちからも、搜て見る御了簡」河「イヤ〳〵、法眼今日より心を改め、義經とは敵味方」妻「エヽイあのお前は義經樣を」河「ヲ鎌倉殿へ討て出す氣。合點行ずは是見よ」と、懷中の書翰投出せば、手に取上、文言殘らず讀終り、妻「ムゝウ義經公此山に御忍びまします事　鎌倉へ知たやうな文體」河「ヲヽいかにも汝が云ふごとく、天に口なし、人を以てい

まだ〳〵とーやう〳〵

はしむる。告知せた者なくて、小舅の茨左衛門、斯いふて越すべきや。内通せられて知たる上は、遁れなき判官殿、人に手柄させんより、我手にかけて討所存」妻「ヤア夫は眞實か」河「應」妻「イヤほん〳〵に此方樣は、義經公を切心か」河「くどい〳〵」妻「ハアはつ」と吐胸も突詰し、夫が刀拔より早く、自害と見ゆる女房が、持たる刃物引たくり、河「こりや何とする何で死ぬ」と、いふ顏きつと打守り、妻「ヱヽ聞へぬぞや法眼殿、なぜ隔ては下さるぞ。恩賞の御下文、千通萬通來た迚も、一旦の契約變ずる此方の氣質じやない鎌倉殿の忠臣、茨左衛門が妹の飛鳥、義經公の御隱れ家、兄の方へ知らせたかと此狀が來た故に、疑ふての心じやの。覺ない云譯を、まだ〳〵として居られぬ。疑ふよりは一ト思ひに殺して下され法眼殿」と、恨涙ぞ誠なる。法眼始終を聞すまし、以前の一通取より早く、ずん〳〵に引裂き〳〵、「僞に命は捨まじ。女房を疑ふは未練には似たれ共、義經公へぬけめなき我忠節、衆徒等の胸中探りし次手、心引見るこの體狀、引裂捨れば安堵して、自害を止まれ女房」と、解る詞は春の雪、恨も消てなかりけり。「ヤア法眼歸られしな、面談」と義經公、奥の間より出させ給ひ、「鞍馬山の好を忘れず、一々の御厚志祝著詞に述がたし。兼て申談ぜし通り、今日の衆徒の評定、委細あれにて承知せり」と、御諚

にはつと頭を下げ、「師の坊の命と云、只ならぬ御方。疎略なき心底、御存の上は身に余る悦び、此上や候べき。武藏坊は、奥州秀衡方へ遣はされ、御家臣迚少ければ、龜井駿河なんどが如く、思し召し下されよ」と申詞の内、使者罷出、「佐藤四郎兵衛忠信殿君の御行衛を尋御出なり。通し申さんや」と、窺ふにぞ、義「扨は無事にて有つるな。此方へ通せ對面せん」と、仰傳ふる次の間へ、法眼夫婦は立て行。案内に連て入來る四郎兵衛忠信、御座の間の此方に出、絶えて久しき主君の顏、見るも無念のあら涙、指俯伏いて詞なし。大將御機嫌斜ならず、義「汝に別れ爰かしこ、鎌倉殿の御詮義つよく、身の置所なかりしに、東光坊の弟子河連法眼に匿はれ、心ならざる春を迎へ、暫くの命をつぐ。我姓名を讓りし其方、命全く有事、我運のまだ盡ざる所、頼もしし、悦ばし。其砌預けたる靜は如何成しぞ」と、御尋有ければ、忠信未審げに承はり、「コハ存がけなき御仰、八島の平家一時に亡び、天下一統の凱歌を上給ふ折から、告來る母が病氣、聞し召及ばれ、御暇給はつて、本國出羽へ歸りしは去年三月、程なく別れし母が中陰、忌中に合戰の疵口おこづき、破傷風といふ病と成、既に命も危き半、御兄弟の御中さけ　堀川の御所沒落と承はる口惜さ。胸を煎る程重る病氣、無念さ余つて、腹切んと存ぜしかど、せめて

おこづき―病の起ちんとする時いふ（俚言集覽）

は主君の御容顔、今一度拜し奉らんと、念願叶ひて本復遂げ、初立の長旅忍の道中恙なく、此館に御入と承はり、只今參つた忠信に、姓名を給はりし、靜御前を預けしなんど、御諚の趣、且以て身に覺へ候はず」といはせもあへず、氣早の大將、「ヤアとぼけな忠信。堀川の館を立退し時、折よく汝國より歸り、靜が難義を救ひし故、我著長を汝にあたへ、九郎義經といふ姓名を讓り、靜を預け別れし其方、世になき我を見限つて、靜を鎌倉へ渡せしな。義經が所在搜に來たか。只今國より歸りしとは、まざ〳〵敷僞表裏。漂泊してもうつけぬ義經、たばからんとは推參なり。不忠二心の人外。アレ引つくゝつて面縛させよ、龜井駿河」と腹立の、聲にかけくる二人の勇士、裾はせ折つて忠信が、弓手馬手に反打かけ、「委細あれにて皆聞た。サア腕廻せ四郎兵衞。靜御前の御行衞、サア明白に白狀せよ。踏付て繩かけふか、拷門して云せふか。サアどふじや、サアどふじや」と、せりかけられてせん刀、指添共に投出し、「兩人待た麁忽すな」兩人「待てとは、但云譯有か。サア聞かふ、サアなんと」なんと〳〵に難義の最中、「靜御前の御供申、四郎兵衞忠信殿御出なり」と奏者が聲に、人々仰天、「何忠信が又來たとは、合點行ず」と聞もあへず、以前の忠信立上り、「我名をかたるは何でも曲者。引くくつて大將への面晴せん」

うつけぬ—とぼけぬ

せん刀—せん方なくにかく

と駈行を、「ヤアならぬ〳〵、詮義の濟迄動さぬ」と、龜井が向ふをさょへたり。義「ヤアさなせそ六郎。忠信是に有上に、又忠信が靜を同道。何にもせよ、子細ぞ有ん、片時も早く是へ通せ」「あつ」と龜井は次の間へ。我身あやぶむ忠信は、默して樣子を窺へば、別れ程經し君が顏、見たさ逢たさとつかはと河連が奧の亭、歩み來る間もとけしなく、靜「ナウ我君か　懷かしや」と、人目厭はず縋り付、戀し床しの溜々を、涙の色にしらせけり。義「チヽ、女心に歎くは尤。別れし時云聞せし如く、人の情に預かる義經、輪廻穢き擧動ならねば、つれなくはもてなしたり。忠信を同道とや、何處に有」と尋給へば、靜「只つた今次の間迄連て參りしが、爰へはまだか」と見廻し〳〵、「それ〳〵、ても早ふ爰へ來てじや。一所にお目にかょる物を、ちつとの間に先へ拔けがけ、まだ軍場かと思ふてか　まんがちな人では有」と、恨み口なる詞に不審、一倍晴れぬ四郎忠信、「我君も其如く覺なき御尋。拙者めは今の先、出羽の國から戻りがけ。去年お暇申てから、お目にかかるは只今始めて」靜「エ、あの人のじやら〳〵とてんがうな事計」忠「轉業でなし大眞實」靜「アレ、まだ眞顏で欺すのか」と、何氣もなまめく詞の中、立戻る龜井六郎、「靜樣同道の忠信、引立來らんと存ぜし所、次の間にも有合さず、立關長屋所々方々、尋ても知れ

とけしなく―氣が氣でなく

輪廻きたなき―闇に迷うた未練のふるまひ

早ふ爰へ云々―靜が眞の忠信を見ての話

まんがち―自分勝手

てんがう―いたづら

二人有中―二人居つた中
つれ〳〵―つく〳〵づく

ず候」と申に、心迷はせ給ひ、義「コレ靜、爰に居るは其方を預たる忠信ならず。只今國より歸りしと物語りする中、忠信靜を同道との案内、二人有中にも見へざるは不審者。面體似たる贋者ならずや。靜心は付ざるか」と、仰の中に忠信を、つれ〳〵と打ながめ、靜「ハアどふやらそふおつしやれば、小袖も形も違ふて有。ア、お待遊ばせやハッアそれか。ヲヽ左樣ぢや、思ひ當る事が有。君が筐と別れし時、給はりし初音の鼓、御覽遊ばせ此樣に、肌身も放さず手にふれて、忠信の介抱請、八幡山崎小倉の里、所々に躬を忍び居たりしに、折々の留守の中、君戀しさの此鼓、打て慰む度々、忠信歸らぬ事もなく、其音を感に絶る事、ほんに酒の過た人同前。打止めばきよろりつと何氣ない顏付は、よく〳〵鼓が好そふなと、初手は思ひ二度三度、四度目にはテモかはつた事、又五度めは不思議立、六度めには怖氣立、夫よりは打ざりしが君爰にと聞付て、心せく道忠信にはぐれた時、鼓の事思ひ出し、打ば不思議や目の前に、來る共なく見へたるは、女心の迷ひ目かと、思ふて連立來りしに、又此時宜はどうぞいの」と、申上れば義經公、「ムウ鼓を打ば歸り來るとは、それぞ能詮義の近道。靜其方に云付る。其鼓を以て同道した忠信を詮義せよ。怪しい事有ば、此刀で」と投出し、「我手で討れぬ鼓の妙音。夫を肴に一

深紅―辛苦にかく

獻酌ん、早々鼓打〳〵」と、云捨て奥に入給へば、龜井駿河も忠信に、引添てこそ入けれ。靜は君の仰を請、手に取上て引結ぶ、辛氣深紅をないまぜの、調結んで胴かけて手の中しめて肩に上、手品もゆらに打鳴す、聲清々と澄渡り、心耳を澄す妙音は、世に類なき初音の鼓。彼洛陽に聞へたる、曾稽城門の越の鼓、斯やと思ふ春風に、誘はれ來る佐藤忠信、靜が前に兩手をつき、音に聞とれし其風情、すはやと見れど打止ず、猶も樣子を謠調の音色、聞入聞居る餘念の體、怪しき者とは見て取靜、折よしと鼓を止め、靜「遲かつた忠信殿。我君樣のお待兼、サア〳〵奥へ」と何氣なき、詞にはつとは云ながら、座を立おくれ指俯く、油斷を見すまし切付るを、ひらりと飛退飛しさり、「コハ何となさるゝぞ」と、咎められて氣轉の笑、靜「ホ、、、、ヲ、あの人の氣疎い顏、久振の靜が舞、見よふと御意遊ばす故、八島の軍物語を、舞の稽古」と鼓を早め、舞かくて源平入亂れ、船は陸路へ、陸は磯へ、漕寄打出打ならす、鼓に又も聞入りて、餘念たはいもなき所を、靜「忠信やらぬ」と又切かくる、太刀筋かはしてかいくぐるを、付入柄元しつかと取、忠「何科有て欺し打に。切るゝ覺へ嘗てなし」と、刀たぐつて投捨れば、「贋忠信のサア白狀。仰を請た靜が詮議、云ずば斯していはする」と、鼓押取りはた〳〵、

女のかよはき腕先に、打立られてハァはつと、誤り入たる忠信に、鼓打付、「サア白狀、サア〳〵〳〵さあ」と詰寄られ、一句一答詞なく、たゞ平伏て居たりしが、漸に頭を擡げ、初音の鼓手に取上、さも悲しく押戴き〳〵、靜の前に直し置、しづ〳〵立て廣庭へ、下りる姿もほ〳〵と、みすぼらしげに手をつかへ、忠「今日が日迄隱しおゝせ、人にしられぬ身の上なれ共、今日國より歸つたる、誠の忠信に御不審かゝり、難義と成故據なく、身の上を申上る始りは、夫なる初音の鼓。桓武天皇の御宇、内裏に雨乞有し時、此大和國に、千年功經牝狐牡狐、二疋の狐を狩出し、其狐の生皮を以て拵へたる其鼓、雨の神をいさめの神樂、目に向ふて是を打ば、鼓は元來波の音、狐は陰の獸故、水を起して降雨に、民百姓は悅びの、聲を初て上しより、初音の鼓と號け給ふ。其鼓は私が親、私めは其鼓の子でござります」と、語るにぞつと怖氣立、騷ぐ心を押しづめ、靜「ムゝそなたの親は此鼓。鼓の子じやといやるからは、扨は其方は狐じやの」忠「ハツアなる程、雨の祈に二親の狐を取れ、殺された其時は、親子の差別も悲しい事も、辨へなきまだ子狐。藻を被く程年も長け、鳥居の數も重なれど、一日親をも養はず、産の恩を送らねば、豕狼にも劣りし故、六萬四千の狐の下座に著、只野狐と輕蔑まれ、官上の願も叶はず、

藻をかつぐ程―狐なみに化けるほど
鳥居の數云々―狐は稻荷の鳥居を數多く越すほど出世するといふ俗傳による
いさめ―慰める

鳩の子云々―鳩に三枝の禮烏に反哺の孝あり

親に不孝な子が有れば、畜生よ野良狐と、人間ではおつしやれども、鳩の子は、親烏より枝を下つて禮義を述べ、烏は親の養を、育返すもみな孝行。烏でさへ其通り、況て人の詞に通じ、人の情も知る狐、何ぞ愚痴無智の畜生でも、孝行といふ事を、知らいで何と致しませぬ。とはいふ物の親はなし、まだも頼みは其鼓、千年功ふる威德には、皮に魂とまつて、性根入たは則親。付添て守護するは、まだ此上の孝行と、思へ共淺間しや、禁中に留置給へば、八百萬神宿直の御番、恐れ有れば寄付れず、頼も綱も切果しは、前世に誰を罪せしぞ。人の爲に怨する者、狐と生れ來るといふ、因果の經文恨めしく、日に三度夜に三度、五臓を絞る血の涙、火焔と見ゆる狐火は、胸を焦する炎ぞや。かほど業因深き身も、天道樣の御惠で、不思議にも初音の鼓、義經公の御手に入、内裏を出れば恐れもなし、ハツァ嬉しや悦ばしやと、其日より付添は、義經公の御蔭。稲荷の森にて忠信が、有合さばとの御悔み、せめて御恩を送らんと、其忠信に成かはり、靜樣の御難義を救ひました御褒美と有て、勿體なや畜生に、清和天皇の後胤源九郎義經といふ御姓名を給はりしは、空恐ろしき身の冥加。是といふも我親に、孝行が盡したい、親大事親大事と思ひ込だ心が屈き、大將の御名を下されしは、人間の果を詰たる同然、彌親が猶

大切、片時も離れず付添鼓、靜様は又我君を戀慕ふ調の音、かはらぬ音色と聞ゆれ共、此耳へは二親が、物いふ聲と聞ゆる故、呼びかへされて幾度か、戻つた事もござりました。只今の鼓の音は、私故に忠信殿、君の御不審蒙つて、暫くも忠臣を苦ますは汝が科、早く歸れと父母が、致の詞に力なく、元の古栖へ歸りまする。今迄は大將の御目を掠し段、お情には靜様、お詫なされて下さりませ」と、椽の下より延上り、我親鼓に打向ひ、かはす詞のしり聲も涙ながらの暇乞、人間よりは睦じく、「親父様母様、お詞を背きませず、私はもうお暇申まする。とは云ながら御名殘、惜かるまいか二親に、別れた折は何にも知らず、一日々々立につけ、暫くもお傍に居たい產の恩が送りたいと、思ひくらし泣明し、焦れた月日は四百年、雨乞故に殺されしと、思へば照日が恨めしく、曇ぬ雨は我涙。願ひ叶ふが嬉しさに、年月馴れし妻狐、中に設けし我子狐、不便さ餘つて幾度か引るゝ心を胴欲に、荒野に捨て出ながら、飢はせぬか凍へはせぬか、若獵人に取れはせぬか、我親を慕ふ程、我子もてうど此様に、我を慕はふがと、案じ過しがせらるは、切ても切ぬ輪廻のきづな、愛著の鎖に繫ぎ留られて、肉も骨身も碎る程、悲しい妻子をふり捨て、去年の春から付添て、丸一年立や立ず、往ねと有迚何とまあ、あつと

申て往なれましよかいの〳〵。お詞背かば不孝と成、盡した心も水の泡、せつなさが餘つて歸る、此身は何たる業、まだせめてもの思ひ出に、大將の給はつたる、源九郎を我名にして、末世末代呼はる共、此悲しさは何とせん。心を推量し給へ」と、泣つ口說いつ身もだへし、どうど伏て泣叫ぶは、大和の國の源九郎狐と、云傳へしも哀なり。靜は遺女子氣の渠儂誠に目もうるみ、一間の方に打向ひ、「我君夫にましますか」と、申內より障子を開き、義「ヲヽ、委しく聞屆けし。扨は人にてなかりしな。今迄は義經も、狐とは知ざりし。不便の心」と有ければ、頭をうなだれ禮をなし、御大將を伏拜〳〵、座を立は立ながら、鼓の方をなつかしげに、見返り〳〵行となく、消る共なき春霞。人目朧に見へざれば、大將哀と思し召、「アレ呼かへせ、鼓打。音に連またも歸りこん。鼓々」と有けるにぞ、靜は又も取上て、打ば不思議や音は出ず、「是は〳〵」と取直し、打共〳〵「こは如何に、上共平共音せぬは。ハア扨は魂殘す此鼓、親子の別れを悲しんで音を止たよな。人ならぬ身も夫程に、子故に物を思ふか」と、打しほるれば義經公、「ヲヽ我迚も生類の、恩愛の節義身にせまる、一日の孝もなき父義朝を長田に討れ、日かけ鞍馬に成長せめては兄の賴朝にと、身を西海の浮沈、忠勤仇成御憎しみ　親とも思ふ兄親に、見捨

られし義經が、名を讓つたる源九郎は、前世の業我も業。そも何時の世の宿酬にて、かかる業因なりけるぞ」と、身につまさるゝ御涙に、靜はわつと泣出せば、目にこそ見へね庭の面、我身の上と大將の、御身の上を一口には、勿體涙に源九郎、たもち兼ねたる大聲に、わつと叫べは我と我、姿を包む春霞、晴て形を顯はせり。義經御座を立給ひ、手づから鼓を取上て、「ヤイ源九郎、靜を預り長々の介抱、詞には述がたし。禁裏より給はり大切の物なれ共、是を汝に得さする」と差出し給へば、狐「何其鼓を下されんとや。ハア〳〵〳〵、有がたや、忝や、焦れ慕ふた親鼓、御辭退申さず頂戴せん。重々深き御恩のお禮、今より君の影身に添、御身の危き其時は、一力を防奉らん。返すゞも嬉しやな。ヲヽ、夫よそれ、身の上に取紛れ、申事怠つたり。一山の惡僧ばら、今夜此館を夜討にせんと企たり。押寄さする迄もなし、我轉變の通力にて、衆徒を殘らず誑かつて、此館へ引入〳〵、眞向立割車切、又一時にかゝつし時、蜘手かくなは十文字、或は右袈裟左袈裟、上を拂へば沈んで請、裾を拂はゞひらりと飛、けいしやう祕術は得たりや得たり、御手に入て亡ぼすべし。必ぬからせ給ふな」と、鼓を取て禮をなし、飛がごとくに行末の、跡をくらまし失にける。始終の樣子詳に、聞て驚く四郎兵衞龜井駿河諸共に、御前に進

蜘手かくなは十文字―縱横十文字　けいしやう―輕捷か

出、「生類の誠有辯舌にて、大將の御疑ひも、某が心も晴て、此世の大慶上なし」と、申詞も終らぬ所へ、河連法眼罷出、「怪力亂神を語らずといへ共、彼源九郎が申せしは、一山の衆徒、今宵夜討に來る條、先達て忍びを入候所、恰も符節を合するごとし。敵を引受戰はんか、討て出で申べきや。賢慮如何」と伺へば、四郎兵衛忠信「よき計略ごさんなれ。狐に讓り給ひしも、元は拙者に給はる姓名。君にかはつて討死せば、一旦事はしづまらん。平更御免を蒙り度存奉り候」と、余義なき願ひに御大將、「我思ふ子細有ば、暫く此場は立退れず。我名を名乘衆徒等を謀れ。汝死すれば我も死、必討死すべからず」と、御帶刀を給てげる。仁德厚き御詞に、出行跡を見送つて、「靜、來れ」と打つれ奥にぞ入給ふ。時も移さず入來るは、山科の荒法橋、我慢の大太刀指こはらし、案内に及ばずずつと通り、「コレ〳〵法眼殿、只今は直の御出、近頃祝著。義經搦めおかれしとや、お手柄といひお使がら、早速ながら參つた」と、詞に人々目を見合せ、扨は鼓の返禮に、きやつを謀り寄せたるよと、心に點頭き、芝「いかにも〳〵、奥の殿に搦置。さあいざ〳〵」と先に立、龜井に目はじき間もあらせず　得たりと利腕取手も早く、床も碎けとずでんどう、起しも立ず踏付〳〵、早繩たぐつてくゝり上、宙に引立大將の、見參に入んと勇

怪力亂神云々―論語の句

計略ごさんなれ―計略ごそあるなれ

平更―平に

只今は直の御出―狐が法眼に化けて法橋の許に行きしなり

白衣―知らぬにかく

長廊下―長うすねにかく

くる〳〵―くるくる坊主に來るをかく

それながら―其儘

み行。義經ならぬ源九郎が、計略とこそしられたり。次へ來るは梅本の鬼佐渡、何でもつかみ喰はん面付、眼に見へぬ源九郎に、つまゝれ來るとは白衣の、袖押まくつて屋敷の隈々睨廻し、「イヤ法眼殿、只今は早々の仕合せ。まだ歸られじと思ふたに、何もかも手ばしかい。シテ囚人は」と、出かし顔なる鼻の下、長廊下をやり過し、蹴かへす板間蹈すべり、する〳〵駿河に蹈みのめされ、無念々々の手間隙いらず、同じく奥へ引立行。扨三番めは返り坂の藥醫坊、くる〳〵道も佛頂面、「ヤレせはし、ハテせはし。行わいやい、マヽ待やい。こりや其樣に引ずるな、衣や著物が破れるはい。扨々無禮な使じや」と、源九郎に化されて、何をいふやら譯もなき、中にしはざはこもりける。法「ヲヽ待兼し藥醫坊、サア〳〵こちへ」と寄顔で、小腕ぐつと捻上れば、藥「アイタヽヽこりや何とする」法「ヲヽ斯する」と、それながら大の法師を引かづき「貴殿計は法眼が手料理の馳走ぶり。義經公の獻立を、待て切かた致さん」と、笑ふて奥に入にける、勇氣の程ぞたぐひなき。斯としら刃の大長刀、鐏土に突き鳴し、衣の下は海老銅鎖、頭は袈裟にひんまとひ、ゆらり〳〵と入たるは、只者ならぬ横川の覺範、大庭に二王立、「河連殿はいづくに有。客僧是へ參入せり。奥へ推參申さんか。とく〳〵對面々々」と、呼はりながら歩み

行、後の障子の内よりも、「平家の大將、能登守敎經待」と聲かけられ、思はずきつと見かへりしが、聲「ム、聲有て形なきは、我を呼には有ざりし。覺へなき名に驚きて、思はぬ氣おくれ。ハヽヽヽヽ、人なくて恥かゞざりし」と、獨言して行所を、「ヤア卑怯な敎經能登の守。九郎判官義經が、とくより是に待かけたり」と、障子をさつと押開く。見るより覺範望む所、長刀柄ながくかい込んで、飛びかゞらんず顏色に、ちつ共臆せず莞爾と笑ひ、義「げに紅の簾印は、衆徒にやつせど隱れなし。水練に名高き敎經、八島の沖にて入水と見せ、底を潛つて浮み出、此世に有とは、疾より知つてまがひなき面體、あらがはれな」と優美の詞、「ホさかしくも云たりな。敎經にもせよ誰にもせよ、汝に敵對覺範に、物の具もせず出合は、此場を助けて囉ひたさの追從。命惜さに骨折は、苦勞九郎」とあざ笑へば、義「ヤア我は顏なる云事かな。弓勢には及ばず共、太刀打手練は負べきや。天命に盡たる平家の刃、義經が身に立ば、サア立て見られよ能登守」と、いはせもあへず上段に、薙でかゞるを小太刀にて、からりてう〳〵はつしと請、もどく長刀いしづきにて、胴腹ぬかんと突かゞるを、はつたと蹴させて付入にぞ、あしらひ兼て義經は、詞にも似ず迯て入。「逝さじやらじ」と、奥の間の、隔の障子蹴放し〳〵、かけ行向にこは何如に、

鵜たけ―奇麗なる

しなしたり―しくじったり

玉座を設け安德帝、鵜たけなる御姿。敎「コハ〳〵勿體なや淺間しや、何とて爰にまします」と、胸打さはぎ奏問す。君は氣高き御聲にて、「尼上を始め一門殘らず、海に沈と聞つるに、敎經はさはなかりしな」敎「はつ」と刹答黑髮を、隱せし頭巾かなぐり捨、鎧の袖かき合せ、「臣が乳母子讃岐の六郎といふ者、能登守敎經と名乘、安藝の太郎兄弟を左右に挾み、海へ飛入空しくなり、又此敎經は人しらぬ磯邊に上り、祈禱坊主の山科法橋、賴んでやつす姿は覺範、義經に仇を報はんと、駈入此間に玉體のまします事。擒れさせ給ひしか、恐れながら勅諚に明させ給へ」と奏すれば、まだ幼天皇も、御涙にくれさせ給ひ、「敎經も知ごとく、八島の內裏を遁れ出、賴なき世を待つるに、義經に廻り逢、源氏の武士の情有、心に恥て知盛は、我事をくれ〳〵と、賴で海へ入たるぞ。夫より丸も爰に來て、今敎經に逢事も、皆義經が計ひ、日の本の主とは生るれ共、天照神に背きしか　我治めしる我國の、我國人に惱され、我國狹き身の上にも、只母君が戀しいぞ。都に有し其時は、富士の白雪吉野の春、見まくほしさと慕へども、小原の里におはします母上戀しと慕ふ身は、花も吉野も何かせん。あぢきなの身の上を、思ひやれ」と計にて、伏轉びてぞ泣給ふ、御いたはしさ勿體なさ。「エヽしなしたり〳〵、知盛も敎經も、遁

牛の車―憂しにかく牛車は公卿の乘車

工みし計略智謀、義經に見さがされしは、よつく武運に盡たるな。ヘッエ是非もなや口惜や」と、無念の奥歯に血をそゝぎ、握り詰たる掌裏に、爪も通らん其氣色、數百斤の睡の重り、懲へ兼て居たりしが、萎れし眼くはつと見ひらき、「ハァ我ながら誤つたり。八島の戰ひ義經を組とめんとせし所、船八艘を飛こへ、味方の船へ引たるは、計略の底を探らん爲、卑怯ではなかりしか。今又奥へ逃込しも、我計畧を知たる故、龍顏に逢せ奉るは、武士の情で有たよな。ウム今は助くる。勝負は重ねて、いで歸らん。それ迄は數經が隱家へ還幸あれ。再び廣き世となして、御母君にも逢せません。いざや御幸の御供」と、かき抱き奉る、馬手は長柄の大長刀、「浮世を牛の車とも、しろしめされ」と奏しつつ、立出んとする所に、ゑいと切聲三振の太刀音、すはやと長刀引そばめ、見返る間もなくかけ出る、龜井駿河河連法眼、面々血刀首引かゝへ「卑怯に候能登殿。一味の衆徒等一々に此ごとく討取たり。天皇をおとりにして、後ろ穢き逃足、門打たれば遁れなしサア勝負有か、降參有か　二つに一つの返答」と、詞を揃へて云せも果ず、ぐつと睨付、「頤のあがく儘、降參とは儕等が性根にくらべてぬかしたりな。汝等が首一々提げて往なん事、なにの手間隙入べきや。帝を我に渡したる、義經が寸志を思ひ助け置を、有難

ぐの手ぐ字なりに

いとはぬかさいで、逃るなどとは案外千萬。供奉の穢れ思はずば、睨殺してくれんず奴原、飛しさつて三拜せよ」三人「ヤア人もなげなる廣言。組留て鼻明さん」と、三人ぐの手に追取卷、砂踏ちらして詰寄ば、上には教經葦駄天立、見下す眼、角立て、睨合たる其中に、帝は怖さ玉の緒も、消る計の御風情。「ヤア待汝ら麁忽すな」と、聲をかけて義經公、烏帽子狩衣引繕ひ、物の具ならぬ御出立、「行幸の道を支へ、君臣の禮を亂す、其、憚少からず。しづまれ旁。イザ義經も天皇を御見送り奉らん。用意の裝束斯のごとし。教經一人歸せし迚、天に入德もなく、地に入術も有ばこそ。何條遁なき命、汝等が手にかけず、此所に有合さぬ忠信に討すれば、兄次信が敵を討、修羅の妄執散ずる道理。教經は世狹き身、義經も世を憚る身、互に城も楯もなき、戰場吉野の花矢倉に、勝負々々〳〵を決すべし。天皇入水と披露して、内裏表濟たれば、譬勝共負る共、君に過致されな」教「ホ神妙の詞滿足せり。瑣細の事にかゝはらぬ教經、義經計を狙ひはせじ。天下に倍とる賴朝が素頭取て、君が代に飜へさん。其時は義經には、莊園を申下して得さすべし」義「ヤア言くどし教經。義經をねらはど其儘、兄賴朝に敵對とは、聞捨ならず」と御大將、御帶刀に手をかけて、すはやと見ゆる腹心に、分入宥る源九郎狐、名をかりの恩、忠信が本意なき

思ひしづむるとは、目にこそ見へね君の守護。「さらばよ義經。去にても、帝のお命助たる情の禮には、教經共能登守共、名乘ては敵對ぬが我返報。再會の名は横川の覺範、吉野山にて忠信に出くはして勝負せん。互の命は其時々々」（謠）行幸成ぞ雜人原、路次の警固と呼はつて、又抱上る安德帝、君々たれど君たらず、臣々たれど臣たらぬ、横川の覺範供奉の役、敵々ながら義經が、警蹕の聲高々と威義有意趣有情有、河連法眼先驅の役、駿河の仕丁、龜井の六位、官人ならぬ堪忍の、二字を守つてひかゆれど、布衣なさ余つて鯉口の、くつろぐ光り銀魚袋、供奉は門前人目有、赦させ給へと敬つて、頭はさけても顏と顏、睨んで別るゝ兩大將、源九郎義經の、義といふ字を訓と音、源九郎義經附添し、大和言葉の物語其名は高く聞へける。

君々たれど云々―君雖レ不レ君、臣不レ可レ以不レ臣

布衣―六衣の衣物、本意にかくる

義といふ字云々―源九郎義經と源九郎き經

第五

謠　山々は皆白妙に白雪の、梢するどき氣色かな。佐藤忠信大音上、「淸和天皇の後胤檢非違使五位の尉源の義經なり。兄賴朝が家來の汝等、現在我に敵するは主に刃向ふ無道人。天狗に習ひし妙術にて、一々に蹴殺して、谷の水屑としてくれん。觀念せよ」と呼

横川―よくにかけしとまゞ―蹟かゞ

はつたり。右往左往に取巻たる、讒者一味の鎌倉勢、聲々に、「ヤア主從とは事をかし。主か主で有ざるか、討取て見せ付ん。かゝれやかゝれ」と、一面に打てかゝるを事共せず、右へ薙立左へ拂ひ、切立々々切立れば、「一先引」と鎌倉勢、逃るをやらじと岨道を、足に任せて追かくる。平家の大將能登守、忠信に出合んと、約束違へぬ衆徒頭巾、形も横川の覺範を、人はそれともしら雪を、踏ならしてぞ歩くる。山端岩角けしとまず、追ちらして立歸る佐藤忠信、兼て期したる約束の、敵は向ふに待かけたり。鎌倉勢のかへさぬ中に、名乘合して勝負せんと、立寄る相手をつこりと、笑ふて待たる勇將義士、互に招かれ招き合、思「去年三月八島の磯にて、大將軍の御馬の先に立塞り、忠心に矢を請とめたる佐藤三郎兵衛次信が弟、四郎兵衛忠信、兄の敵平家の大將能登守教經、恨の刃參らする」とぞ名乘ける。教「ヲヽしほらしや忠信、兄の敵と名のるからは、討れてやるが本意なれ共、安德帝を守奉り、再び天下を覆す教經。不便ながら返り打冥途で兄に云譯せよ。横川の禪師覺範が、引導してくれんず」と、長刀杖につき反し、かんらからとぞ打笑ふ。詞たゝかひ終つて後、眞向かざしに忠信が、討てかゝる大太刀を、かはしてはた〳〵はつしとあふ。ひつぱづして忠信が、切身に入たる太刀先を、もどいて拂ふ

ていかち―打合ふ太刀音

長刀の薙手、打手に事共せず、右にかゝれば左へ踊り、左りに乘んと取直す、白刃鐔て いから〳〵、唐紅の緋縅や、互に勝色分ざりしに、覺範頻に打かくれば、ひらりと飛で大木の、櫻の梢に身をたもつ。追取直して櫻の木、はすにすつかと切かけて、足に任せて踏放せば、木はめり〳〵〳〵と中絶し、向ふの岸に忠信が、木におくられて渡り越、跡は架橋丸木橋、是究竟と踏しめ〳〵、渡る不敵の勇猛將、過つて踏止めし、足場すべつて谷底へ、落れど落ちず諸足に、枝をまとふて眞逆樣、只一刀と討かくる、四郎兵衞が太刀先を、拂ふ長刀水車、草摺の音鍔の音、ちりゝんはた〳〵、しつてう〳〵、實目覺しき働なり。追散らされし鎌倉勢、忠信遣らぬと取てかへし、又ばら〳〵と討かゝるを、南無三寶邪魔と渡りあひ、打合ふ隙に覺範が、櫻にかけし諸足を、切んとかゝれば木を放れ、落るを見捨て鎌倉勢、鏖にと追て行。谷には教經手練の早足、ひるまず巖に長刀を、突立々々駈上れど、雪に凍たる土碎け、氷柱に岩石滑らかに、上れば滑りすべつても、岨の梅が枝足代に、半上りし岩の上、鎌倉勢を追ちらし、弓手の方へかけ來る佐藤忠信、覺範爰へと招かれて、上るに隙のあらし遲し、忠信それへと云捨て、さしもに高き頂上より、ふはと飛だは飛鳥より、遙に輕き其勢ひ、我もと覺範つゞいて飛び、あ

高紐―鎧の綿がみに著くる紐
鞦韆―ブランコ
ずつかり―すっぱり

はや高紐總角が、枝にかゝつてぶら〳〵、稚遊に鞦韆の、戯れなんど見るごとく、身動きならぬを忠信が切付るを身を背け、くるりと廻れば枝ずつかり、切放されしは天命に、盡ぬ所と大手をひろげ、かゝる相手も太刀投捨て、互にゑいやと引組だり。こりや〳〵〳〵と忠信が毘沙門腰にて押かくれば、ひらりと外してどつこいと、踏とまつたる魔利支天、雪踏ちらして爭ひしが、何とか仕けん忠信が、組だる小手先もぎ放され、又組寄らんとする所を、ぐつと摑かつぱと投、膝に引敷折こそ有、不思議や又も駈けくる忠信、のつかゝつたる覺範が、具足の隙間をでうど切。きられて怯まず振返り、見るより惱り、「コリヤ忠信、こいつ何じや」と引しいたる、高紐摑んで引上れば、忠信ならぬ義經の御著長の鎧計。「是は」と剝るゝ虛を窺ひ、切付々々切付る、深手にさしもの能登守。「サア寄て首取」と、云より早く義經公、駈付給ひ、「いかに教經、安德帝は小原の里にて御出家遂、御母君の御弟子とせん。適名高き教經なれ共、通力自在の源九郎狐、忠信に力を添たる鎧、軍術にも裏かゝず」と、仰もあへぬ出合頭、河越太郎重賴、左大將朝方を高手に縛しめ、「久しう候義經公。給はる鼓に事を寄、賴朝追討の院宣と號しは、朝方が業と事顯はれ、義經に計はせよと、綸命を請て參つたり」と、聞より教經座を立上

り、ホウ平家追討の院宣も、朝方が所爲と聞。彼奴を殺すが一門への云譯」と、云より早く首打落し、「サア〳〵義經、教經が首取」と、云せも果ず、「ヤア能登守教經は、八島の冲にて入水せり。横川の覺範が首は忠信に」と、仰の中に振り上て、兄の敵を討納め、打治つたる君が代に、奥刄へ行、小原へ行。平家の一類討亡ぼし、四海太平民安全、五穀豐饒の時を得て、穂に穂榮ゆる秋津國、繁昌ならびなかりけり。